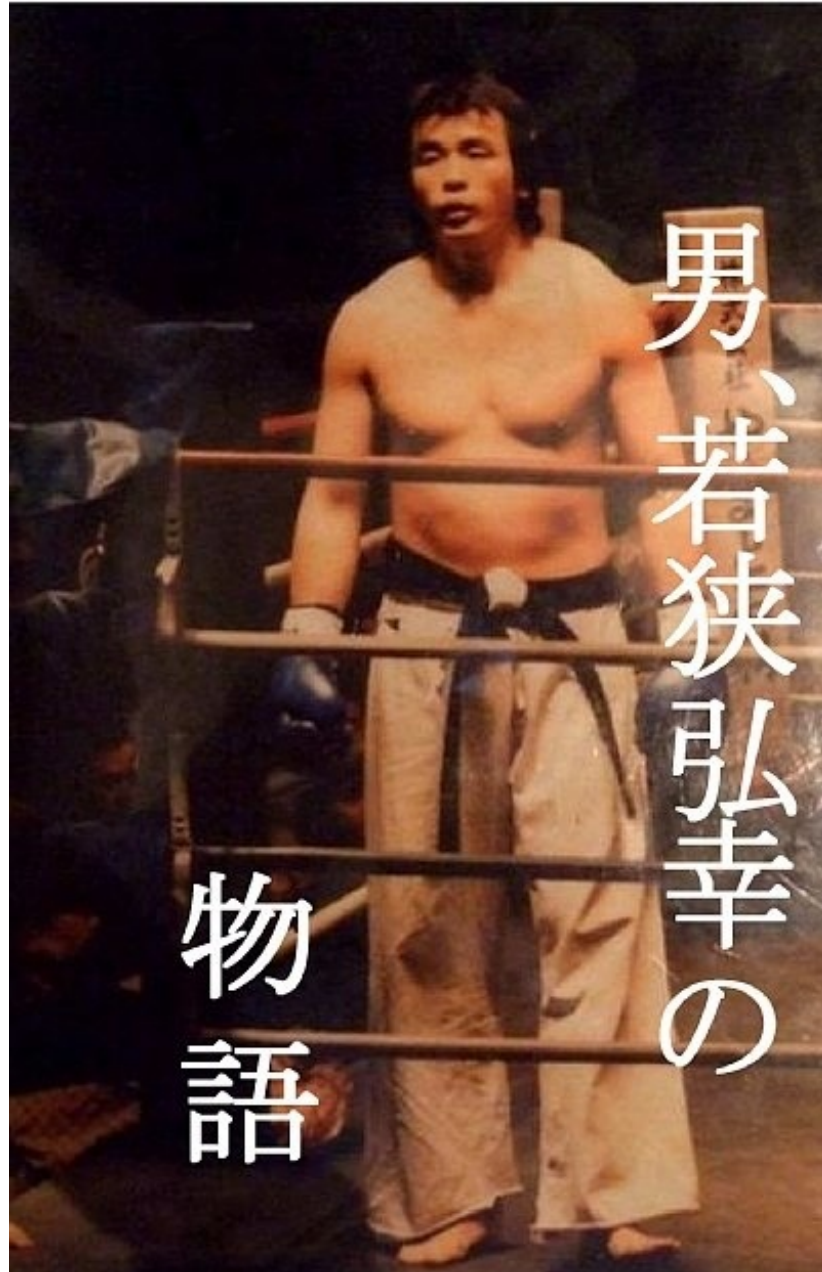




男、若狭弘幸の

物語



■主な戦績

1993年 土道館全関東大会優勝

1994年 土道館全日本大会優勝

1995年 キックボクシング、プロデビュー

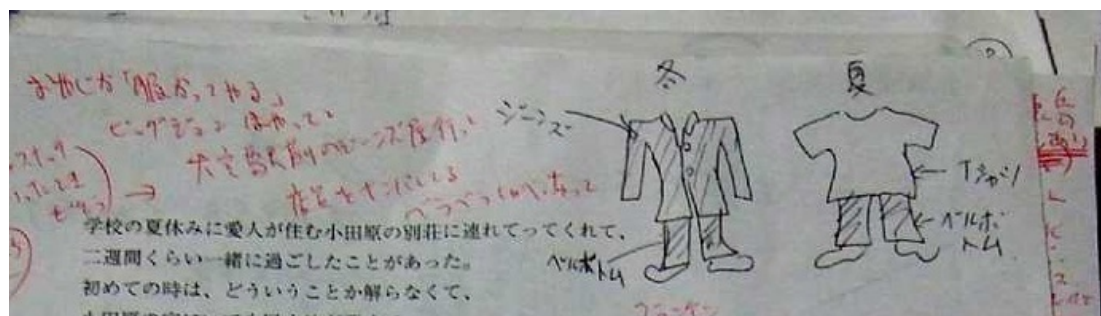
1996年 村上竜司戦

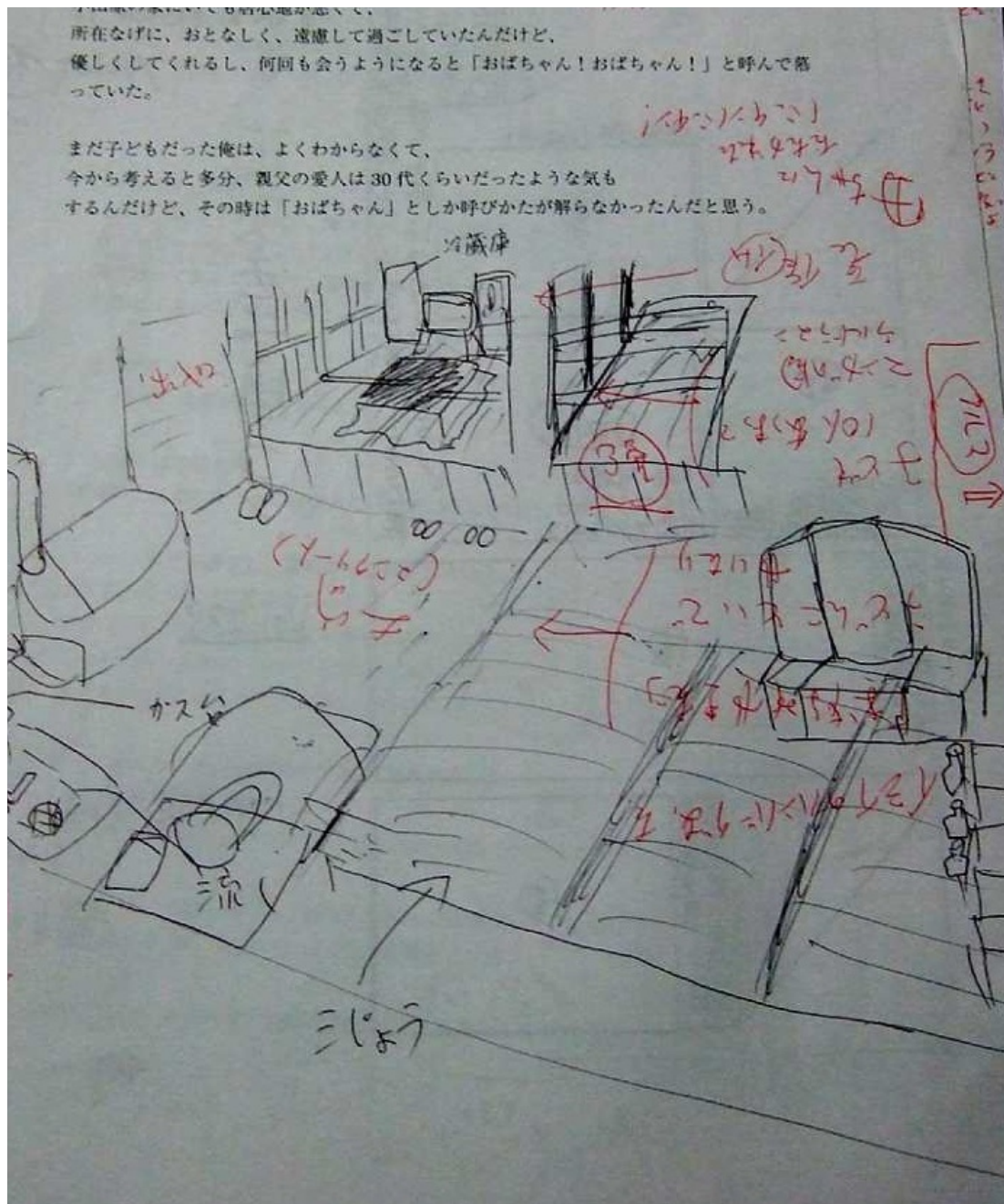
1997年 元ムエタイ・ルンピニーミドル級王者ウィチャーン・チョー・ロヂャナチャイ戦

※プロ戦績9戦7勝2敗4KO MAヘビー級3位

2005、2006、2008年 新極真空手全東北大会準優勝

2007年 新極真空手全関東大会準優勝





昭和40年代ー焼けるように暑い真夏の夜、眠れない。

開け放した小窓から入ってくる蚊が、うるさい。

そして外から漂ってくる悪臭。

今夜も、また酔っ払いの嗚咽...

酔っ払いの小便、糞、ゲロの臭いのなかで、

子どもの頃、生活していたんだよね。

隣のバーのジュークボックスの大音響。

繰り返し、繰り返し、流れるピンキーとキラーズの曲。

酔っ払いの怒鳴り声、ジャーという小便の音、オエーっという嗚咽。

開け放した家の台所の小窓から小便、ゲロ、大便の臭い。

バタバタバタと走るとぶネズミ、雨漏りのする、くそ暑いトタン屋根の家のなかで。

そんなハキダメのどん底の暮らしがあり。

若い頃は、勝って名を上げることしか考えられなかった。

男としての人生、勝たなきゃクソなんだ。

自分のことだけで精一杯だった。

でも、それは30代の後半辺りから考え方が変わってきた。
男としての生きざまとは、何なんなんだ....。

埼玉県大宮市の自衛隊駐屯地のすぐ近くに、俺の家があった。
ここは終戦直後、進駐軍の利用を考えて、祖父が経営する
タクシー会社のうちの、ひとつの営業所として作られたところ。
営業所の前面はシャッターが下ろされていて、
なかにはタクシー2台が入る車庫があり、
その隣に運転手が仮眠するために四畳半と三畳の部屋があって、
奥に小さな台所。

もう、ずっとシャッターが閉まったままの、
ボロになったこの営業所に、
俺と、ひとつ年上のねえちゃん(あゆみ)、
母ちゃん(あい)の三人で暮らしてた。

家のすぐ隣にバーがあって、
カウンターに2〜3人のショート・カットでミニスカの若い女が働いていて。
毎晩、夜7時頃から、この店で騒ぐ酔っ払いたちの怒鳴り声、
そしてジュークボックスの大音響が響き続ける。

そう、この時代にはカラオケなんかなかったから、
ジュークボックスなんですよ。

ピンキーとキラーズ、布施明、森進一の曲なんかが、
繰り返し、繰り返し聞こえてくる。
夜中まで、ずっと、自衛隊駐屯地の近くで働く、
公務員宿舎のスーツ組が、酔っ払って騒いでいた。

この連中が、酔って俺の家の壁に小便をかけてる。
ジャーという小便の音、オエーという酔っ払いの鳴咽。
ある男はゲロを吐いたり、大便までしていた。
母ちゃんが、やめてください、って注意しても無視。
この家には女と子どもしかいない、って知ってるからナメている。
家のなかまで臭いが充満してくる。

朝、起きると家につけられた、こうした酔っ払いたちの小便とゲロ、
大便を、母ちゃんが片付ける。
そんな毎日だった。

悲惨で貧乏な、どん底の暮らしのなかで、
けれども俺は明るく、元気に育った。

家の戸を開けて外に出ると、すぐそこに『自衛隊駐屯地前』と書かれたバス停があった。
目の前に広い道路があって向かいの通りの歩道には
『大宮駅西口行き』の看板が付いたバス停が立てられていた。

このバス停のところに酒屋があった。
そして、その左隣に錆びた看板で『山乃食堂』と書かれたラーメン屋さんがあった。

家の前の歩道は、いちよう並木がすごく綺麗で、
いつも腹が減っていた俺はギンナンをたくさん拾って、
ポケットに山盛りに詰め込んだまま、コタツのなかで寝てしまって。
冬、家の暖房はコタツしかなかった。
子どもたちだけだから危ないから、という理由でストーブはなかった。
もちろん夏、暑い日もクーラーなんて、なかった。
すごく貧乏だったから。

だから寒い冬の日、外から帰ってくるとコタツにもぐりこみ、
そのまま寝てしまうことが多かった。
この日も、そうだったんだよ。
そうしたら、すごく臭くなってきて、
ねえちゃんに怒られた。
ギンナンは皮を取って、種だけ食べられるということを、
俺は知らなかったんだよね。

家の正面の通りの先は自衛隊駐屯地の門があって、
そこには、いつも自衛官が二人、立っていた。
毎晩、酔っ払って俺の家に小便をかける公務員宿舎のスーツの連中は嫌いだったけど、
自衛官は大好きだった。
大男で強そうで、すごく立派、すごく男らしい、と思った。
だから、いつも敬礼をした。
無視している自衛官もいたけれど、敬礼を返してくれる自衛官の人もいて、
それが、すごく嬉しかった。

『山乃食堂』の暖簾には大きな字で「ラーメン」と書いてあって、
ここが山内さんの家。
新潟出身の大柄で無口なおじさんが経営していて、
その息子の大きな茂(しげる)とチビの正巳(まさみ)は本当にデコボココンビで、
幼稚園で初めて出会ったとき、
こいつら、いきなり俺に、あかんべーとベロを出した。
でも、この2人は、俺の友だちになった。

3人で防空壕に潜って遊んだり、いたずらばかりやってた。
よく『タイガーマスク』ごっこをして遊んでたんだけど、
遊んでるうちに、みんな、だんだん本気になっていっちゃって、
俺は茂の右ストレートを食らって、ぶっ倒れた。
でっかい茂には、かなわなかった。
茂は小学校4年くらいの頃から、
自分の親父の軽トラックを運転してた。

茂は本当に、めちゃくちゃなヤツだった。
そんなだから茂は18歳の時に、バイクの事故で死ぬことになっちゃったんだけど。

おじさんは大工仕事が上手で、前は大工さんだったんじゃないのかな、
と思ってたけど、そうじゃなかったらしい。
器用な人だったよね。

たぶん俺の家の事情を察して、山内のおじさんは、
俺に、すごくやさしくしてくれていた。
おじさんは軽トラックで、よく市場へ連れてってくれた。

茂と正巳と一緒に川へ、海へ、
魚取りをして遊んだり、
初めてのスキー場も、山内のおじさんに連れて行ってもらった。
スキーに行く前の晩、朝早いから山内さんの家に泊まった。
まあ、道路を挟んで真向かいが家で、すぐ近いんだけど、
遊んでいたかったし、それで山内さん家に泊まったわけなんですよ。
この夜、生まれて初めて中華丼を食べて感激した。
なんだこれ、ご飯なんだ、すげえ、世の中には、こんなに美味しい料理があんのかよ、
と思った。

中古の自転車も貰ったし、野良犬のために、
おじさんが作ってくれた犬小屋も貰った。

竹馬、リヤカー戦車も、広い空き地の大きな樹にロープを張って、
ターザンみたいに豪快にぶらさがれるという、そんな遊ぶものを
いろいろ作ってくれた。

広い運動場に行って
「おまえら運転してみろ」と軽トラックを運転させてもくれた。
小学生の時、俺と茂と正巳は、こうして本当の車も運転した。
そうして茂は、いつしか、おじさんに内緒で公道を運転したりするようになっちゃったんだけどね。

俺と茂と正巳は、いたずらばかりやってて、
おじさんが重いフライパンを振るってるすぐ脇で、
火の点いたコンロに向かってコオロギを放り込んで遊んでた。
燃えるコオロギが、それぞれジタバタと死んで行く格好が変で、
ぎゃははは、と笑ってた。

そうしたら、おじさんが仕事の手を休めて、いきなりコオロギを掴んだ俺の手を、
強く握り締めて炎のなかに突っ込もうとした。

俺は、びっくりして全身が硬直した。
すると、おじさんは一言、「コオロギだって熱いんだぞ」と。

それだけ言うと、また黙々と、おじさんはフライパンを揺すり出した。

いつも、やさしい山内のおじさんが怒るのを見たのは、
この出来事が最初で最後だった。

俺は茂ほどではなかったけど、
この頃から大柄で学校で背の順に並ぶと後ろのほうだった。

学校では「くさい」「えんがちょ」と言われて、いつもイジメられて泣かされてた。

頭が悪いもんだから、宿題は忘れるし。
クラスみんなにバカにされて、殴られて、
毎日、泣かされてた。

担任のヒキガエルみたいな顔をした中年女の小林先生が、みんなの前で言った。
冬休みが終わって学校が始まると「みんな、お年玉いくら貰ったの?みんなで一人ずつ発表しまし
よう!はい、それじゃあ、梅田君から」と、五十音順に、みんなで発表させられる。

梅田君は「六千五百円」と言う。
俺は貧乏なんですよというのが嫌だったけど、
じいちゃんから貰った「千五百円」とだけ言うことができた。

それから小林先生は、みんなの前で、家の母ちゃんのことを、
みんなでご飯を食べている給食の時に、
こんなふうに言ったことがあった。

「大体、若狭君のお母さんがだらしないのよね。
ちょっと綺麗な感じの人だな、と思ってたんだけど、
家にいったら、まあ、散らかっててねえ、汚ったないしねえ。
若狭君がダメなのは、そもそも、
そういう、だらしないお母さんとかね、家庭環境が悪いのよね」

この言葉は、つらかった。
自分のことを言われるのは仕方がないんだけど、
自分の母ちゃんのことを、クラスのみんなに、そんなふうに言われたことは、
本当、たまらなかった。

テレビ漫画に登場する強いヒーローに憧れてた俺は、
おもちゃ屋の床で大の字になって、
「かあぼう、買ってよおー!」って、
ゴジラの人形を買ってくれ、と母ちゃんを困らせたこともあった。

両手に買物袋をさげて歩く母ちゃんの背中におぶさって、
首筋の匂いを嗅ぎながら寝るのが好きだった。

母ちゃんはポーラ化粧品のセールス・レディとして働き、
女手ひとつで家計を支えていた。
中年太りだったけど化粧品のセールスをやらせてもらえるだけに、
そこそこ綺麗な顔立ちだった。

毎日、忙しく働いているのに、
母ちゃんは毎朝、早起きをしてキッチンと朝食を作ってくれた。
台所からトントントンと聞こえてくる包丁でまな板を叩く音、
味噌汁の匂いで目覚める。

焼魚、目玉焼き、ご飯。
俺は肉が大好きだったから、くじらの生姜焼き、くじらベーコンが、
おかずに出る日は、すごく嬉しかった。
ねえちゃんは肉は嫌いだったから、
だから「アユミ、これ、ちょうだいよ」なんてね。
そうして、くじらベーコンを貰ったりしてね。
あと俺は母ちゃんが作ってくれる海老ご飯が大好きだったねえ。

魚屋さんで買ってきた車海老を醤油で煮て、
その煮た汁も一緒に入れて、ご飯を炊くんですよ。
家にはミリンなんてなかったから、醤油だけ。
でも、それが美味くてねえ。
ご飯が炊き上がるのが、もう待ちきれなくて。
もう、いい匂いが、ぱあっと舞い上がってきてね。
「カチッ」って炊き上がる音がすると、
もう、がばっ、と蓋開けて。
家は保温ジャーじゃなくて、炊けたらそのまま冷えちゃうんだけど、
もう全然、残らなかったね。
いっぺんに全部、食べちゃったよね。
海老ご飯は夕飯の時だったんだけどね。
まあ、そうした朝食の用意をして、母ちゃんは働きに出て行くわけですよ。

父・豊と母・あいは二人とも大宮出身。
終戦直後、大宮の駅前で豊がナンパして、やがて結婚。

父ちゃんの豊は、家にお金を入れてくれない。
一人でアメリカへ遊びに出かけたり、
蝶ネクタイ姿でシボレーを乗りまわして、
小田原に別荘を持ち、
キャバレーで働くカジヤマケイコという名前の女と暮らしていた。
金を使って遊んでばかり、酒ばかり飲んでいた。
自分とは違って、細身の男だった。

働かない父親が金を持っていた理由は、
 いた。

敷みたいな家に住んでいた。

祭から表彰されるほど、
だった。

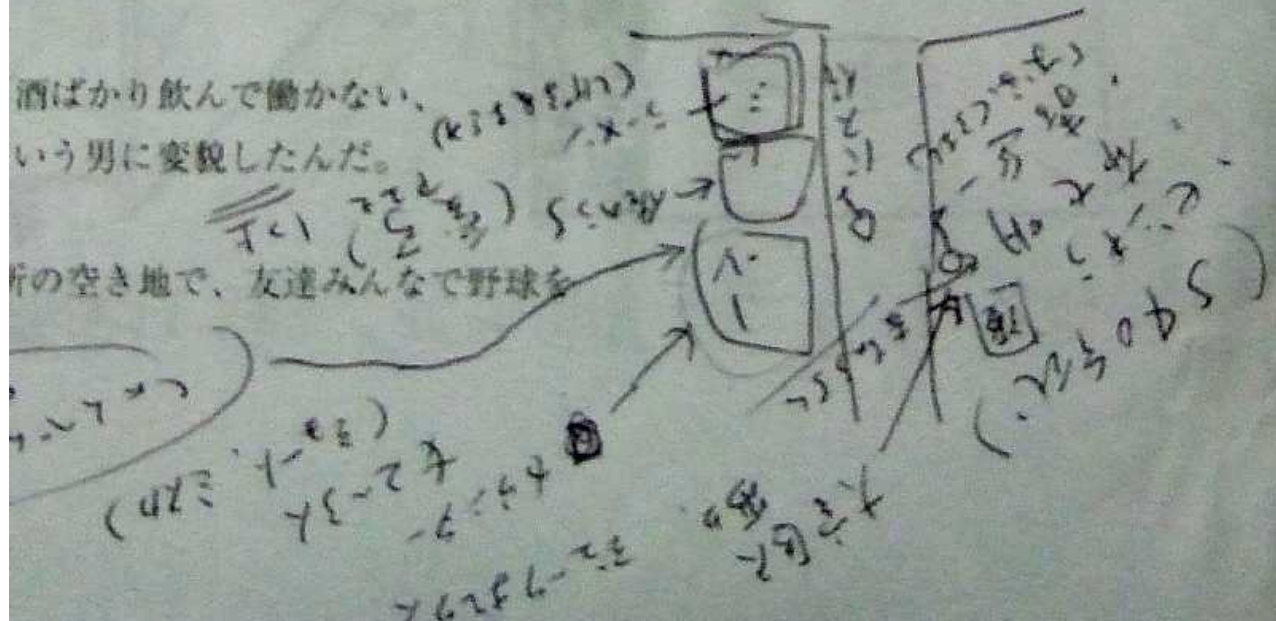
でも厳格な人で、
下に弟たちがいたが、
厳しく育てていた。

で 56 歳で他界してから、

ていたものから開放されたんだろう。

酒ばかり飲んで働かない、
いう男に変貌したんだ。

所の空き地で、友達みんなで野球多



第一章-2

遊んでばかり、まったく働かない父親が金を持っていた理由は、
じいさんの遺産があったからだ。



じいさんの名前は若狭長作。
埼玉県大宮市のでっかい屋敷みたいな家に住んでいた。

タクシー会社を創業し、警察から何かで表彰されるほど、
地域社会に貢献する働き者だった。
そんな長作じいさんは、とても厳格な人で、
自分の父親は長男で、その下に弟たちがいたが、
そうした自分の子どもたちを厳しく育てていた。

そんな長作じいさんが肝硬変で56歳で他界してから、
自分の父親の態度は変わった。
多分、これまで抑えつけられていたものから開放されたんだろう。

金使いは荒い、女はつくる、酒ばかり飲んで働かない、

家族の面倒は一切、見ないという男に変貌したんだ。

俺が小学校2年くらいの時、近所の空き地で、友達みんなで野球をしていたら、いきなり親父の怒鳴り声がした。

「ちょっと来い！」

親父は、もう酔っ払っていた。

いきなりパン、パンと思い切り顔に平手打ちをされた。

「なんで俺は社長になれねえんだ！」

親父は自分の弟たち、親戚たちに嫌われて、
会社の経営には参加することが出来ずにいた。

俺は泣きながら「お父さんは、社長になるべき人なんだ...」と言わされた。

俺は、こんなふうに、いつも親父が帰ってくると、
なんだかんだ怒鳴られて叩かれた。

これは母親にバツが悪いから、というか、
文句や小言を言われないようにするために、
そういうことを煙にまくために、
俺をダシにして叩く。

テレビでいつも楽しみにしていた『仮面ライダー』を観ていると、
酒を飲みながら、だんだん機嫌が悪くなってきて、

「そんな、くだらないテレビ観るんじゃない！」と、
裏番組に変えられてしまう。

それは『男・決断』という漫画で、
零戦特攻隊の話だったが全然、面白くなかったことを憶えてる。
まだ子どもだったから、まったく内容がわからなかったから、
だから、つまんなかったのかな...どんな内容なんだろう、もう一度、観てみたいなあ。

まあ、そうして、また、なんだかんだ言われて叩かれる。

俺が怒鳴られて、叩かれているとき、
母親はいつも台所で、ただ黙って洗物をしてる。

姉がいるんだけど、親父が手をあげるのは、俺だけ。

こうして、俺は、いつも親父に叩かれる。
叩かれながら、
どうして、おふくろは、止めてくれないんだ、と思った。

だから家の前に親父の車があると、
嫌だなあ、と思った。
また殴られるんだ、と思った。

でも、そんな親父も妙に機嫌がいいときもあって、
クリスマスのときに帰ってきて、
俺とおねえちゃんにプレゼントを買ってくれたことがあった。

たぶん、一緒に住んでたケイコさんに言われたんだろう。
クリスマスなんだから、
子どもにプレゼントしなさいよ、とかね。

大宮駅前の商店街のおもちゃ屋に出かけて、
俺はブリキ製のゴジラを、
おねえちゃんはりかちゃん人形を買ってもらった。

おねえちゃんは、ものすごく喜んでいた。
もちろん俺だって。

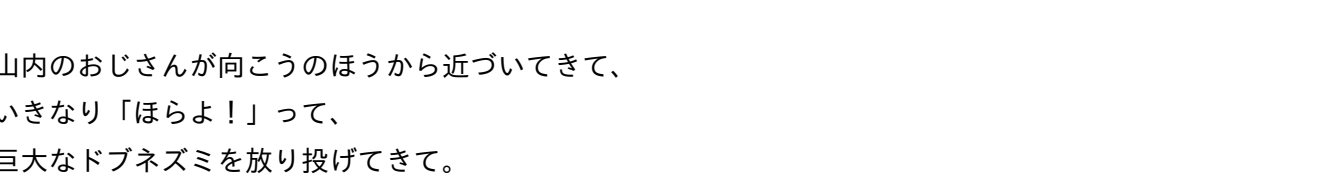
俺のゴジラは足の底のところにタイヤが付いてて、
リモコンで動きながら時折、くちから煙を吐いた。
すげえなあ、どんな仕掛けになってんのかなあ、って。

で、そんなゴジラで一人で遊んでたら、
どうしてもゴジラの対戦相手が欲しくなっちゃって、
おねえちゃんのリカちゃん人形を相手に戦わせてたりして。

そうしたらさ、
リカちゃん人形の髪の毛がゴジラのタイヤに引っかかっちゃって、
ガー、ってリカちゃんの金髪がタイヤに巻きついちゃって。
リカちゃん頭ぐちゃぐちゃになっちゃって、
顔なんか白目剥いちゃって。

それを見たねえちゃん、
わあー、って怒った、怒った。
もう大泣きしちゃって。

親父に殴られて、
ねえちゃんは新しいリカちゃん人形を、
また買ってもらえたんだけど、
俺のゴジラは買ってもらえなかった。
もう動かないこわれたゴジラを、
むなしく抱えるしかなかったねえ。



うわあ、って。

頭から巨大なドブネズミが降ってきた。

あれは、びっくりしたよなあ。

いつも山内の家で遊んでた。

一階が食堂で、二階に小さな部屋が二つあって。

俺と茂は、この二階の窓から屋根に出て、

ぼろい屋根の上に座ってた。

「待ってよ、待ってよ」と、

まだ三歳くらいの正巳は、いつものように泣きながら追っかけてくる。

俺と茂は大きかったから、

「探検しようぜ」って、いつも、どんどん突っ走って行っちゃうんだけど、

小さな正巳は追いついてこれなくて、

いつも泣きながら追っかけてきてた。

いつも、お腹が空いていた俺はというと、

山内さんの家の一階の食堂から漂ってくる美味しそうな匂いが、

たまらなかった。

食堂のなかは、もうボロい店内。

木造でね。汚れてて。

四人掛けのテーブル席が三つくらいあって、

そのテーブルは木で表面が所々剥げてて。

同じようにボロい木造りのカウンターがあって、

お客さんが十六人くらい入ったら、

もう満杯じゃなかったかなあ。

でも昼時は、もう、お客さんで満杯でね。

カウンターの上にダンボールみたいなので書かれたメニューが画鋏で止められてるんだけどね、

「ラーメン100円」「ぎょうざ」「チャーシュー麺」「カレーライス」「チャーハン」とかね。

だから山内のおじさんは、いつも、もう休みなく、

大きなフライパンを振るって、

もう、じゃんじゃん出してたよね。

おじさん出前もやってたしねえ。

一番人気だったのが焼きそば。

この焼きそばがね、もう、すごく美味そうでさあ。

すごく、いい匂いなんだよねえ。

いやあ、食べてみたかったよねえ。

いつか山内のおじさんのソース焼きそば、
食べてみたいなあ、って思ってたんだよね。

お昼の忙しい時間が終わるとね、
お店のなかで遊んだ。

ざらざらしてて、
あっちこっち穴が開いてるコンクリートの床で、
メンコやったりして。

白黒のテレビがいつも点いてて、
そんな店の隅に大きなクマデが掛かってて。
なんか剥げのおじさんとか、
女の人とか海老とかごちゃごちゃあって、
何だろうなあ、これは、と思ったんだよね。

そうしたら茂が
「これは神様なんだよ」って。

へえ、そうなんだ、って。

「ひろちゃん、アメ食べる？」って、
山内さんとこの、おばさんがそう言ってくれて、
よく飴玉を貰った。

おしゃべりで明るくてね、元気なおばちゃんで。
飴玉と言えばね、山内さんのところで働くおねえちゃんも、
よく飴玉くれたっけなあ。

山内さんのお店は朝七時から夜は十一時まで開店してて、
そんなに広いお店じゃなかったんだけど、
やっぱり、おじさんと、おばさんだけじゃ大変だったもんだから、
同じ新潟県から来たおねえちゃんが働いてた。

季節労働みたいな感じなのかなあ、
年中はいなかったんだけど、
夏とか冬とか、そういう季節毎に働きにやってきてて。

よく、その、おねえちゃんから
「いでも描いたら」って言われて。
なんだろう「い」って、って思ったりしたんだけど、
「絵」のことなんだよね。

新潟の方言で「え」が「い」って聞こえんだよねえ。

小柄で痩せてて多分、十九とか二十歳くらいの年の女の子だったと思うけど、
明るくて、元気な人だったな。

あるとき、俺と茂が便所の前でメンコをしてたら、
扉が、こう、ぎー、っと勝手にゆっくり空いてきちゃって。
そしたらさ、おねえちゃんが、おしっこしてて。
真っ白なお尻がそこにあって。
ジャー、って、おしっこしながら、こっちに顔向けて
「こらっ」って。

そうして何事もなかったかのように、
またパンツはいて仕事してたよね。

なんか、こっちのほうがバツが悪かったよなあ…。

日曜日、朝八時、茂の家に遊びに行った。
自衛隊の駐屯地のずっと先の方に、でっかいダムがある、
ということを知って、
この日は朝早くからダムを探検をしよう、ということになった。

俺と茂が、いつもみたいに、わーっ、と走ってて、
後ろから正巳が「待ってよおー！待ってよおー！」って、
いつもみたいに泣きながら追っかけてきて。

面倒臭いなあ、赤ちゃん部隊みたいだよなあ、って思ったりして。



あれは冬の日で、川に氷が張ってて、
茂と俺はジャンプして飛び越えたんだけど、
まだ、ちゃっちゃい正巳には、もう全然無理で、
だから川の前で、ぎゃー、って泣いちゃってて、
でもおいてきぼりになりたくないもんだからさ、
俺たちも無理だとは思ってたんだけどさ、
面倒臭いから、もう、早く来いよ、って。
そしたら、や、って、飛んだんだよ。

そしたら、やっぱり、どぼーん、って川のなかに落っこちちゃって。
正巳の体半分くらい川に浸かっちゃってて、
もう、ぎゃんぎゃん泣いてるし、
仕方ないから俺が抱えて引き上げてやってさ。

もう正巳は、ずぶ濡れで、ぎゃー、ぎゃー泣いてるしさ。

そしたら、そのちょっと先に保育所みたいなところがあって、
ずぶ濡れで泣いてる正巳を見つけたおばさんたちが集まってきちゃってさ、
「あら、どうしたの！」って。

もう正巳は赤ちゃんみたいに抱えられちゃって。
「まあ、ひどい！かわいそうに、よしよし」って。
そうして、おばさんたちに連れて行かれちゃったんだよね。

それ見て、俺も茂も焦っちゃって。

大変だ、正巳、あの家の子にされちゃう、って。
さらわれちゃった、って。

もう、びっくりして、
俺と茂は走って帰って、
おじさんに大変だよ、って話して。

そしたら、おじさん、いつものように仕込みやってて
「ああ、そうか。じゃあ、仕込み終わったらな」って。
そんな、のんびりやってる場合じゃないよ。

でも、そうして仕込みが終わってから、
おじさんの軽トラックに乗って行ったんだよね。

そしたらさあ、正巳のやつ、
キレイな服着せられてさあ、
ちゃっかり、ニコニコ笑って遊んでやんの。

なんだよ、おまえ、って。

おじさん、そこの保育所のおばさんたちに謝って、
そうして軽トラックに乗って帰ってきて。
こんなやつ心配すんじゃないよ、ホントに。

こんなふうには茂と正巳とは、本当によく一緒に遊んだんだけど、
他にも近所に友だちがいて、
俺の家に、みんなで集まって遊んだりもした。

そうして、みんなで家のなかで遊んでると腹が減ってきて、
小麦粉をといで「お好み焼きだ」なんて、
焼いて作ったり、
冷蔵庫のなかにあった石井のハンバーグなんかを、
あつためて、みんなで食べたりもした。

みんながいなくなって、
母ちゃんが仕事から帰ってきて、
そしたら、もう、すごく怒られた。

「あれは今夜のおかずだったじゃないのよ！」って、
もうバンバンに叩かれた。

バカだよなあ、俺って。
でも、しょうがないもんなあ、
腹減るから。
もう、いつも腹減らしてたからなあ。

コンクリートのままの土間の流しがあって、その脇に木製の古い風呂があって。
そこに玄関があって。
ガスで火を点けるからボンッと炎が燃え上がって怖かったんだけど、
その横に旧式のおっこち便所があって。
白黒テレビの隣に長作じいちゃんの仏壇が置かれた小さな茶の間があって、
そこに冷蔵庫があって。
この隣が三畳で、ここで家族三人が寝る部屋。

屋根はトタン板だから、雨が降ると、
カンカンカンッと、バリバリバリッと、ものすごい音がする。
そうしてポツリ、ポツリと雨漏りがする。

あちこちにバケツを置いて、
そうするとピチャン、ピチャンと雨の雫が落ちる音が、
部屋のなかに響き続ける。

それでも生まれたときから、
俺はこんな家に住んでんだからね。
そんなの全然、気にならずに寝てた。
ねえちゃんも、そうだったんじゃないのかなあ…。

ただ夏は、もう死ぬほど暑くて暑くて、
さすがの俺も、とても寝てられない夜もあったけど。

もうひとつの三畳の部屋には三面鏡があって、
母ちゃんが販売している化粧品の商品箱が積まれてて。
車庫には昔、おやじが買ってくれた子ども用のすべり台とか置かれて、
物置みたいになってて。
窓はというと、台所と便所に小窓があるだけ。

木造の、そんなボロ家ですよ。
タクシーの営業所として、
車が二台入って、運転手二人が仮眠できるように作られたところに
住んでるわけだから、
暖房はコタツしかないし、夏はクーラーなんかもないし、
一般的な住まい、という感じじゃないんだけど。

そんな貧乏なもんだから、
ハンバーグひとつ食べちゃっても、
それは母ちゃんが怒るのも当たり前だね。
でも、俺には、こんなふうには友だちは、いっぱいいたから。
ねえちゃんの場合は、いつも俺なんかは偉そうに「アユミ、アユミ」って呼び捨てにしてたんだ
けど、
仲が良かった、というか、
ねえちゃんは「ひろちゃん、ひろちゃん」って、
俺の面倒とかよく見てくれたから、
さびしかったりとか、イジケたりはしなかったよね。
いつも元気で、明るかった。

一人きりで家にいるときなんかも、
よく母ちゃんの三面鏡で遊んでたな。
左右の鏡を閉めると、周囲に映る風景が変わるじゃない。
それが不思議で、楽しくて、
よく三面鏡を閉めたり、開けたり、
隙間から覗きこむようにして、
鏡のなかの世界を見詰めてたっけなあ。

俺が小学校一年くらいの頃、
ひとつ年上のねえちゃんは、というと、
やっぱり女の子だし、もうその頃から、
大人っぽい感じがしたよね。

歌が好きでね、気持ちのいい春の日、五月頃ね、
よく玄関を開けて裏の空き地の原っぱに向かって、
一人で歌を歌ってたよ。
家は通りに面してるほうはシャッターだからね、
玄関は裏にあるわけですよ。

それで、ねえちゃんは、
天地真理のテニスコートとかね、辺見マリのやめてとか、
小柳ルミ子の『私の城下町』とか、
そんなのを歌ってたねえ。

友だちがきて二人でとか、四人とかで歌っていたり、
そんなこともあったよ。

俺はそんな女の子たちと歌なんて興味なかったからさ、
テレビがある部屋で絵を描いたりしてたな。

笛を吹きながら友だちと帰ってきたり、
カスタネットとか叩いてたときもあったなあ。
「子狐こんこん～」なんて歌っていたりもしてたなあ。

女の子たちで縄跳びやっていたりもしてたよね。

夏の時、
ねえちゃんが設計図書いた、っていうの。
プールの設計図。
ひょうたんみたいな形の絵。

「これをさ、すぐ裏の空き地で作ろう」って。

「うちの専用プールだよ。
完成したら、もう好きなとき、毎日だって入れるんだよ」

そうして俺は一生懸命にスコップで穴掘って。
結局、ひょうたんみたいな形には出来なくて、
ただの四角い穴みたいになって。

そこにビニール・シートを張って、
ホースで水、引っ張ってきて。

これで水、入れるとプールになるんじゃないか、って、
もう、ドキドキわくわくしちゃって。

でも実際に水を入れてみたら、
なんか、もう、ずぶずぶ沈んじゃって、
泥まみれの状態になっちゃってさ。

あーあ...これじゃあ入れないや、って。

「だめだったねえ」って、
二人でがっかりしてね。

そうして母ちゃんに交通費と百円ずつ貰って、
ねえちゃんに大宮スケート・センターの屋内プールへ連れてってもらった。
うだるような灼熱の午後、人まみれのマンモス・プール。

二時間半で一人百円。

「わたしたち一時に入ったから。
三時半までだから、三時になったら帰る仕度しなきゃね」と、
ねえちゃんは言った。

ねえちゃんは丁寧に教えてくれた。

「お水に顔をつけることを、
まずやらないとダメ」

そうして、まず水に浮かぶこと。

両手をまっすぐに伸ばして、
足をバタバタさせて。

こうして、ねえちゃんに教わって、
初めてバタ足で一メートル泳げた。

「できた！できたぞー！」

「よかったね」

ものすごく、うれしかった。

ちょっとくたびれたんで、
日光浴できる所があって、そこへ行った。

トタン屋根があってね、
そこで大勢の人たちが横になってて、
まるで収容所みたいだ、って思って、
二人ですぐ出てきちゃったんだよね。

すごい暑い日、
学校から帰ってきたら、ねえちゃんが扇風機をガーッと回してて、
「暑い、暑い！」って汗だくになりながら、
サッポロ一番味噌ラーメン食ってんだよね。

あっ、俺も俺も、って、
自分でサッポロ一番味噌ラーメン作って食ってたよねえ。

家のおやつは、
こうして、それぞれ自分たちで勝手に作るという、
いつの間にか、そんなふうになってたんだよね。

汗まみれでラーメン食い終わって、
ああ、美味しかったねえ、って。
夕暮れ時、ひぐらしがカナカナカナカナ、って鳴いてて。

ぼんやり、そんなセミの声を聞いている。

後は二人でテレビを観てた。

『遠山の金さん』が始まって、
『サンダーバード』観て。

それから『まんがの国』。

シンドバッドの冒険、キングコング、マイティハーキュリー、
ウルトラドッグ、突貫進め、宇宙怪獣ゴースト、出て来いシャザーンとかね、
そんなの、よく観てたよねえ。

ねえちゃんは『ハリスの疾風』が好きだったなあ。

それから、やっぱ女の子だから『ムーミン』とかね。
カルピス劇場ですよ。

『ムーミン』って不思議な世界だよねえ、
カバが主人公なんだよねえ。
それで人間と一緒に話したりして暮らしてんだものねえ。
によによ、って、あれ一体何なんだろうねえ。
ミーなんか目玉がギョロツとしてて気味悪い顔してんもんなあ。

なんか山奥から出てきた大男がさ、
ため息をつく、みんな凍っちゃう、っていうね、
そんなストーリー、憶えてるなあ。

あとは『アンデルセン物語』とかね、
『サインはV』『アタックNo.1』とかね、
それは俺も好きだった。

よく、ねえちゃんとバレーなんかやったりして
「回転レシーブだ！」なんて俺やってたよね。

ねえちゃんは怪談とかも好きで、
よく『四谷怪談』観てたなあ。
俺はなんか怖かったんだけど、
『牡丹灯籠』っていうのがあってね、
牡丹燈籠を提げて通ってくる女が実は幽霊で、

その幽霊を好きになった浪人がお坊さんに
御札を貼ってもらったりして、
子どもだったから内容だとか意味だとか、
全然わからなかったんだけど、
なんとなくロマンチックだなあ、って。

ねえちゃんは、そういうのが好きで、
隣のバーのジューク・ボックスの音が響いてきても、
酔っ払いの大声が聞こえてきても、
それでもテレビの前で、
じーっと黙って観てたんだよね。

たぶん、そんな周囲の音も、
まったく聞こえない、
悪臭すらも気にならないくらいに、
テレビのなかで描かれる世界に入ってたんだろうな。
それは俺にしても…。

小学校三年くらいの時、
あれは冬だったなあ。
『あしたのジョー』が大好きで。
明日は、いよいよ少年院で力石とジョーが対決するんだ、って、
番組予告で、ものすごい楽しみにしてて。

ところが、そのとき、
俺、コタツのなかで寝ちゃったんだよね。

はっ、と気づいた時は、もう終わっちゃってんの。
もう、俺、ものすごいかんしゃく起こしちゃって、
横にいたねえちゃんに「どうなったんだよ、おい！」って、
どんなふうになったんだ、って、ねえちゃんに突っかかって。

もう、ねえちゃん、そんなこと、いきなり言われて、
びっくりしちゃってて。

「えーっ、とね…」って、ねえちゃんも一生懸命に説明してくれるんだけど、

よくわかんないんだよね。

「わかんないよ、もう、絵描けよ、描けよ」って紙出して。

「うーん、と...」

ねえちゃん四苦八苦しながら絵、描いて。

ところが、ねえちゃん絵が下手くそなんだよね。

「こんなだったよ」

「なんだよ、これ腕かよ。どっちの腕なんだよ、誰の腕なんだよ」

「えーっと...」って。

ねえちゃんは、わりとおとなしい感じだったんだけど、

それでもケンカすることもあるって、

そうすると、ねえちゃん鼻を噛むんだよね。

ぎゅー、って。

あれが痛くてさあ。

よく鼻、噛まれて泣いてたなあ、俺。

母ちゃんは、忙しく仕事をしてて、

よく帰りが遅くなったりして、

そんな夜は、こうして二人してテレビを観てた。

でも、どんなに疲れて帰ってきても、

いつも寝る前に蒲団のなかでね、

母ちゃんは本を読んでもくれるんだよね。

『ジャックと豆の木』とか『アラジンの魔法のランプ』とか。

二人して母ちゃんに、しがみつくようにしながらね、

毎晩そうやって寝てたんだ。

バーのジューク・ボックスから森進一の『おふくろさん』が流れてきて、

その歌をちょっと口ずさんだりして。

「いい歌だね、この歌」なんて言ってた。

「あ、ひろみの歌だ。ゴーゴー」なんて、ねえちゃんも歌ったりしてね。

毎週日曜日、いつも買い物へ。

公園を抜けてスーパーに行くわけなんだけど、

俺とねえちゃんは、それぞれ母ちゃんの腕にしがみついちやっててね。

「ひろちゃんとアユミちゃん、どっちが好き」って、

ねえちゃんが聞くんだよね。

すると母ちゃんは「両方とも」って。

秋のセミは弱ってて木の低いところにいて、

それを俺が捕まえて「ほら」って、母ちゃんに見せたりして。

「ああ、すごいねえ」って。

帰り道、ゆっくりと辺りは暗くなって、

アユミが「あ、いちばん星！」って空を指差して。

「ああ、キレイだね」って、母ちゃんは小さく笑った。

ゴールデン・ウィークの連休、

三人でバスに乗って、大宮公園へ遊びに行ったこともあった。

この公園には、ちょっとした動物園があってね、

ヒグマがいるということが自慢なんだけど、

ヒグマしかなくて、ほかにはヤギくらいしかいないの。

それでヤギに葉っぱなんかやったりして。

動物園を出ると、

そこに小さな遊園地があって。

ねえちゃんと飛行機に乗って。

俺は鉄棒を見つけて、

その頃、よく遊んでた鉄棒でグルンと回転してジャンプするのを見せて。

「すごいね、ひろちゃん、すごいね」

「もっと出来るんだよ」って、

母ちゃんに見せたくて、見せたくて。

帰り道、人気もまばらなのに、
それでも、ぽつん、ぽつんと屋台が出て。
三人でお好み焼き食べて。
食べ終わったらアメリカン・クラッカーを、
ねえちゃんと、ひとつずつ買ってもらってね。

当時、流行してて、
二人して、いつまでもカチン、カチンって鳴らせながら歩いて。

そうして家に帰ったら、ねえちゃんが、
「明日も休みだよ」って言うんだよね。
「明日も明後日も休みだよ」って。
「えー！ほんとー！」
いいのかよ、そんなに休んでて、と思った。
ゴールデンウイークなんて知らなかったから、
ものすごく嬉しかったねえ。

母ちゃんは一人で、ほんとうに、がんばって働いてくれた。
だからポーラ化粧品会社から表彰されて、
自転車をプレゼントでもらったこともあった。

まだかなあ、まだかなあ。
あ、きたよ、きたよ。
大きな箱に入ってて、
発砲スチロールなんかに包まれて、
大人用の大きな紫色の自転車。

「一往復したら、ひろちゃんね」と、
ねえちゃんも俺も、大きな紫の自転車に、
よたよたしながら乗った。

すごいなあ、大人の自転車って、すごいなあ、って、
そう思いながら届かないペダルに足の先を伸ばしながら、
わくわくしてた。

この自転車に乗って二人で遠出したことがあって、
二人乗りして、
最初はうれしくて、はしゃいでたんだけど、
まだ小さかった俺は、もう疲れちゃって、
夕方になって泣き出しちゃって。
じゃあ、もう帰ろう、って。

もう辺りが、すっかり暗くなった頃、
俺を自転車に乗せて、
ねえちゃんがハンドル押して歩いてくれてね。

「あ、小学校だよ。もうすぐだよ」って、
すっかり暗くなって心細くなっちゃった俺を励ましてくれて。

母ちゃんが洋裁の女子学校出身だったから、
貧しいながらも、ねえちゃんには何種類かの服を作って、
俺なんかにも気をつけて、ツギハギだらけだったけど、
いつも洗濯してくれてたり。
でも間に合わなかったけど、いつも泥だらけだったからね。
酔っ払いとか野良犬のウンコを踏んで、
糞まみれみたいになったことも、よくあったし。

だから母ちゃんは忙しくても、
せっせと洗濯したり、掃除をしたりしてくれてた。

そんな母ちゃんがキレイな浴衣を作ってくれてね、
ねえちゃんにはチューリップの振袖、
俺には狼少年ケンの柄を細かく入れてくれてね。

うれしくて、うれしくて、これを着て、
盆踊りに行って、東京音頭、花笠音頭なんか踊って。
屋台で水に浮かんでる風船を釣り上げたり、
金魚すくいやったりして。

盆踊りが終わると、
もう、みんな一斉に並んでね、
町内会の人たちが子どもたちにジュースを無料でくれるわけですよ。
青い、でっかいポリバケツ開けると、
もうドッカン、ドッカンって感じで、
でっかな氷が真っ赤なジュースのなかに突っ込まれてて。

おじさんが紙のお椀に一杯ずつ入れてくれて、
この真っ赤なジュースがね、
甘くて、甘くて、もう、ただ、ただ美味かったねえ。
これは毎年、夏の楽しみだったなあ。

秋になるとね、
裏の空き地で虫が鳴いていて、
秋の虫を捕ろうよ、って。
母ちゃん、ねえちゃんの三人でコオロギとか捕って。
家のなかで虫かごで、そんな秋の虫が鳴いててね。

ほんとうに貧乏だったんだけど、
ひどいボロ家に住んでたんだけど、
それでも俺は幸せだった。

冬、しーん、と寒い夜、
母ちゃんは、まだ帰ってこなくて。
そんなふうに、ねえちゃんと二人でコタツに入って、
そうやってテレビ観てたんだよね。
今夜は寒いなあ、ってコタツに肩までもぐりこんで、
いつの間にか、そのまま寝ちゃったりして。

そしたら、ねえちゃんが、
「あっ、ひろちゃん、雪だよ、雪」って。
台所にある小さな窓から外を見て、
わあ、って。

いつの間にか雪が積もってて、
二人で表に出てみよう、って。
ねえちゃんに誘われて二人して外に出て。

辺り一面、真っ白なんだ。
なんか、まるで別の世界に変わってて。

やっほー、って言ってごらんよ。

「やっほー」

大きな声で叫んでみた。
そうしたら、なんか自分の声が周囲に染み込むような、
小さく共鳴するような、そんな不思議な感じが、すごく楽しくて。

「もう一回、やっほーって言ってごらんよ」
「やっほー！」

今度は、もっと大きな声を出してみた。

そしたら前にスーツ姿の二人組みの酔っ払いがいて、
一人が
「うるせえ！なにがヤッホーだ！」って、
俺とねえちゃんを怒鳴りつけたんだ。

俺とねえちゃんは、
すごく、びっくりしちゃって、
すごく怖くて、逃げるように家へ走って帰った。

あんなに、いい気持ちだったのに、
なんで、そんなふうに怒るんだろう。

こんな小さな、ささやかな楽しみを、
どうして、そんなふうに....。
嫌だな、怖いな、って感じた。

貧乏だし、家庭環境もそんなだから、

だから近所の山内のおじさんとかが、
そういうの察して俺にやさしくしてくれてたのかも知れない。

でも山内のおじさんも、おばさんも、
そんなことは、ひと言も言わなかったし、
家の事情なんかも聞かれたことは一度もなかった。

ある日、山内さんのところに、
奥さんの妹さんがやって来て、
顔や体型も、性格もそっくりで、
明るくて、愛想が良くて、おしゃべりなおばさんで、
そのおばさんが、俺たちを遊びに連れてってくれる、という。

「東京タワーが完成した、っていうからさ、見に行こう」
ということになったんだ。

1957（昭和32）年6月29日に着工、
1958（昭和33）年12月23日に完工式が開かれた東京タワー。

日本一高いタワーが出来たんだから、
その当時の人々は、
誰だって一度は見てみたいと思うだろう、って、
そんな感じだったんだよね。

小学校三年生くらいのとき、春の日。
初めて東京へ。
いつもツギハギの汚い服着て走りまわってた茂と正巳は、
よそ行きのキレイな白いシャツなんか着ちゃって。
襟なんか付いてるシャツ着てね。

俺もよそ行きのキレイな服着て、
家のおねえちゃんも一緒に、
おばさん子ども四人も連れて。

俺たちは、もう大興奮よ。
電車に乗って窓の外を眺めてて。

でっかいビルが、いっぱいじゃんよ。
すげえや、これは、宇宙人が住んでんじゃないか、って。
オフィスビルとか、ぜんぜん知らなかったから、
誰かが住んでる家なんだと思ったんだよね。

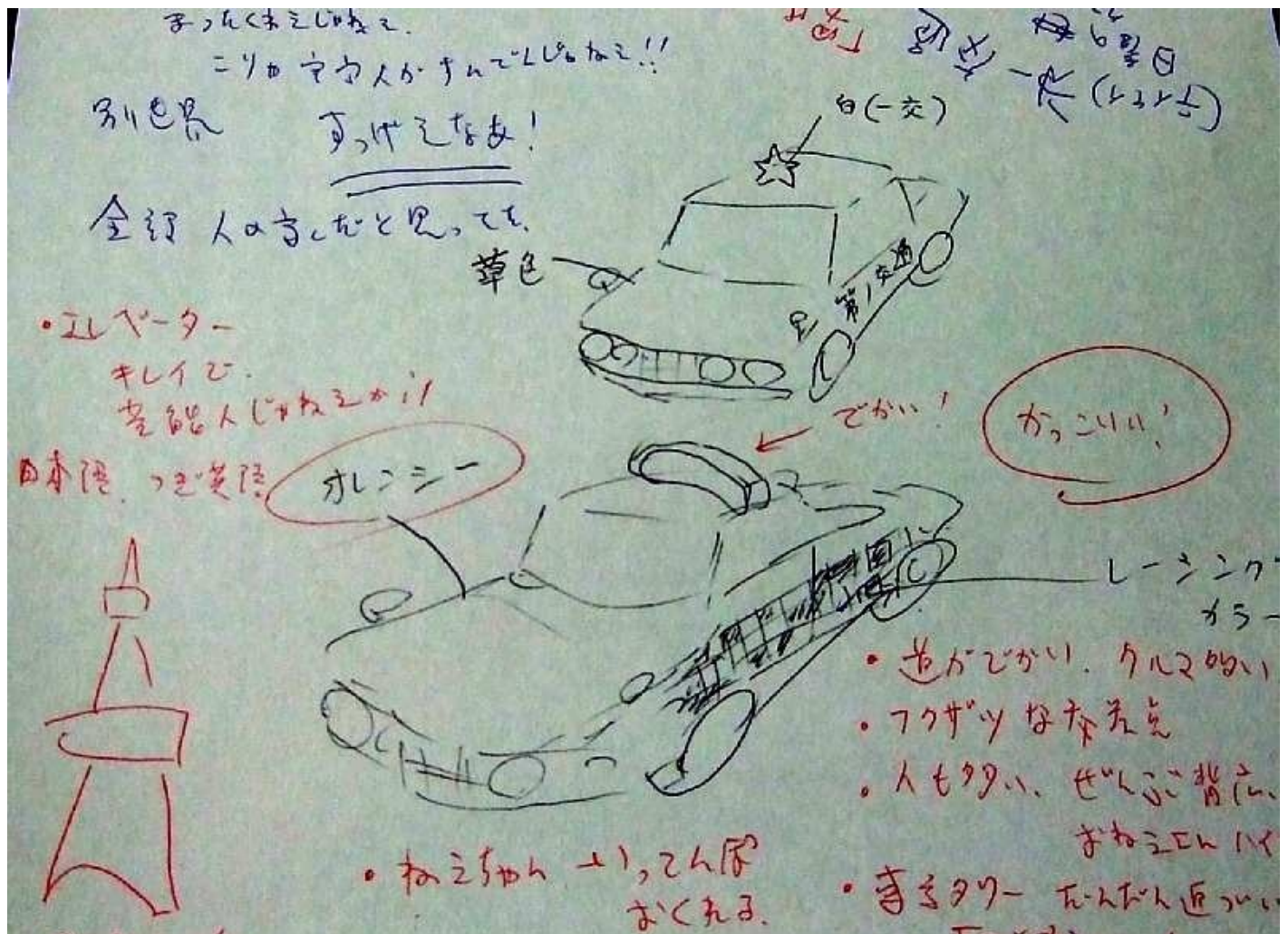
俺たちは、すげえ、すげえ、って騒いでて。
ねえちゃんは女の子だから、
なんか俺たちとは一拍、遅れて返事してんのね。

ねえ、あれ見て見て、って、
ねえちゃんはそう言ったりしてるんだけど、
うるせえな、それどこじゃないんだよ、って。
おい、通りが三車線もあるぜ、なんて。

ひょっとすると、おねえちゃんは上のほうばかり見てて、
俺たちは下のほうばかり見てたのかも知れないなあ。

そうして駅に着いて、
タクシーに乗ったんだけど、
これが、また、びっくりした。

なんだよ、これ、スポーツカーみたいじゃん、って。
カラフルな色のデザインが、かっこよくて。
うわあ、こりゃ、すごいや、って。



そうしてタクシーのなかでも、
町を眺めてて、
おい、みんな、すげえカッコいい服着てんなあ、って。

前かけとかしてる人なんか、ぜんぜんいないじゃん、って。
すげえなあ東京は、って。

だんだん東京タワーが近づいてきて、
到着したら、あれ、東京タワーどこだ、って。
ここだ、ここだよ、おい、って、
見上げて初めて気づいた。

うおー、っこれが東京タワーかよ、って。

そうして、みんなで展望台に昇るエレベーターに乗って。
このエレベーターが、また、すごくて。
すごく綺麗なエレベーター・ガールなんかがいてね。
日本語の説明があって、
その後から英語の説明が追っかけてくるわけですよ。

うわあ、こりゃ、すげえ、って。
感動しちゃったんだよね。

後に、俺のおねえちゃんは、
学校を卒業してサンシャインでエレベーター・ガールになったんだけど、
ひょっとすると、このときの体験が、きっかけだったのかも知れないよねえ。

俺たちは展望台で望遠鏡を取り合ったりして、
おお、野球やってるよ、
なんだよ、まだかよ、早く見せろ、なんて。
俺にも見せろ、なんてね。

そうして俺と茂は、
また、いつものように「探検しようぜ」って始まって。

俺と茂は非常階段に出て、
うわあ、こりゃ、すげえ、って。
どこまでも階段が続いてるぜ。

降りてみよう、って。

わー、って、
もう、どこまでも、どこまでも、
ぐるぐると回ってる階段を駆け下りて。

「待ってよおー！」って、
ちっちゃい正巳は、いつもみたいに泣きながら追っかけてくるんだけどさあ、
もう俺たちは大興奮だから、
そんな正巳なんか、かまってる暇なんかなくて。

そうして、わー、って、
俺と茂は、とうとう東京タワーの一階まで降りたんだよね。

そしたら、そのタイミングで、
ぴんぽんぱーん、なんてアナウンス流れてきて。

「大宮からお越しの山内茂さん、若狭弘幸さん...」って。
どこそこの窓口に来い、って。

そうして行ったら、
おばさんとねえちゃんと、
べそかいてる正巳がいてね。

どこ行ってたの、って、
おばさん、すごく心配してくれたんだよね。

こんなふうには、
本当にお世話になっちゃって、
いろいろ面倒見てもらっちゃってねえ。

そう言えばね、
この頃、すごい嵐の日に、
母ちゃん、俺とねえちゃんを連れて、
よそ行きの服着て、親父方の亡くなった長作じいさんのところへ
行ったことあったんだよね。

母ちゃん、三面鏡の前で化粧をしながら、
その頬に、つーっと一筋、涙が流れるのを見てしまったんだよね。

あ、母ちゃん、どうしたんだろ、

母ちゃん泣いてるよ、
どうしたんだろ、って、
ねえちゃんとコソコソ話したりしてね。

「じゃ、さあ、行こうか」って、
母ちゃん、何事もなかったかのように立ち上がって。

そのときは何だかわからなかったんだけどね、
多分、お金を借りに行ったのかな、
それとも親父のことを相談しに行ったのかなあ。
俺たちも進学したりとか、そういうので、
お金が足りなかったんじゃないのかなあ。
すごい仲悪い、おばあちゃんだったんだけどね、
会いに行ってね。
そんなことも、あったんだよね。

貧乏でも元気だった俺なんだけど、
そんな俺も、実は毎日、学校へ行くのは嫌だったんだよ。
学校では、いつもイジメられてたから。

「臭い！」
「えんがちょ！」
「バカ！」

そう言われてクラスの連中に殴られる。
いつも泣かされてた。
いつも一人ぼっちだった。

でも、それは俺自身にも悪いところがあって、
たとえば宿題なんかやりたくないもんだから、
家に帰ると忘れたフリをして遊んでいるうちに本当に忘れてしまう。

でも、クラスの何人かのグループ責任になるから、
俺と同じグループの連中に迷惑をかけてしまって、
俺が宿題を忘れると
全体責任で掃除をさせられることになってしまったり。
本日もグループ全員、居残りで掃除決定。

「おまへのせいだ」と同じグループの連中のうちの一人から、
いきなり後頭部を思いっきり拳で殴られた。
みんなに迷惑かけてしまって、
だから殴られても仕方ないんだけど。
でも、そうして、いつも帰り道も何人かに待ち伏せされて、殴られた。

キチッと横わけの髪で、つりあがった細目で、
キレイな服で半ズボンの工務店の倅の大出は
「おまえ、うちのクラスから出てけよ」と言って、
俺をイジめる。

秀才ぶってるキザな大出は、退屈すると
「また若狭でもイジメようぜ」と竹内に言って、
そうして俺のところにやってきては、
そんなふうに言う。

[illegible]

学校が嫌で、嫌で、たまらなかった。
早く授業が終わらないかな、
早く学校が終わらないかな、と、
それだけ考えていた。
そうして学校が終わると、待ち伏せされないように、
走って帰るという毎日。

みんなに殴られないように宿題やらなきゃ、
でも、やっぱり勉強はつまないし、
俺は頭が悪いし、だから、やりたくないから。

そんなだから、知能テストもクラスでいちばんビリっけつ。

担任のヒキガエルみたいな中年女の小林先生が、
また給食のとき、みんなの前でこんなことを言った。
二番目にビリだった子には「やれば出来るわよ」と励ましながら、
「でも、若狭君は、どーにもならないわネ」と言った。

するとクラスみんなが当時、流行していた山本リンダの『どうにも止まらない』を、
替え歌にして「どーにもならないヨ」と歌いだして、
とっても、つらくて泣いてしまった。

そうして給食のおぼんを返すとき、
長峰くんが俺に、こう言った。

「コンピュータなんて、あてになんかなんないんだから。気にすんなよ」

長峰泰樹くんは小学校四年のとき、
ウチのクラスに転校してきた。

キリリとした顔立ちで、筋肉質な体型で、
スポーツ万能な長峰くんは、
転校してきたばかりなのに、
クラスのみんなから一目置かれる存在になってた。

そんな長峰くんが、俺の友だちになってくれた。

ある日、学校で日帰りの近場に出かける遠足があって、
丘があって、原っぱがあって、
そこで自由時間になった。

近くに池があって、
長峰くんは「落としちゃうぞ」と、
俺をからかった。

そうしたら俺は本当に池に落ちてしまった。
ずぶ濡れになった俺は、池から上がっても泣きじゃくっていた。

「ごめん、ごめん！」

長峰くんが、そう言って慰めてくれたんだけど、
俺は泣きやまなかった。

そうしたら長峰くんは、こう言った。

「ああ、こんなになっちゃったんだな。
わかった！俺も同じになるから、許してくれ！」

そう言って長峰君は、自分からバシャーンと池のなかへ飛び込んだ。
そうしてバシャバシャやって、ずぶ濡れになって、
池から這い上がってきた。

「これで勘弁してくれ」

すると、それを見ていたおちゃらが
「あーっ！」と叫んだ。

おちゃらと呼んでる女がいて、
こいつは、いつも俺のまわりを、
ちゃらちゃら歩いてて、
何かあると先生に告げ口をする。

そうして、このときの出来事も、
おちゃらは先生に告げ口をした。

「先生！長峰くんは自分から池に飛び込んだんですよ、
あたし見てました！」

でも小林先生は、ずぶ濡れになってる長峰くんに、
何も言わなかった。
てっきり怒られると思ってたのに…。

ずぶ濡れになりながらも、
きりっ、と堂々と立っている長峰くんに、
何も言えずにいた小林先生が、そこにいた。

茂と正巳と、
長峰くんも一緒に四人で線路ごっこで遊んだ。

足元に小川が流れてて、
頭の上に小さな橋があって、
そこを電車が走って行く。
旧・川越線。
大宮から指扇までの一本線。

俺たちは陸橋から線路に頭だけ出して、
目の前に迫ってくる電車を待つ。
お、きたぞ、きたぞ、なんて。

ゴゴゴゴゴッという地響きを立てて、
電車が、ものすごい勢いで目の前に迫ってくる。

「うわああーっ！」と思わず悲鳴を上げてしまう。

でも俺は、ぎりぎりまで頭を引っ込めなかった。

うわあ、おっかなかった、と、
そうして電車が通過して行くのを真下から見送った。

「若狭はみんなより長い時間、我慢した。若狭は度胸があるな」

長峰くんは、そう言ってくれた。

放課後、飼育室に行って、
二人で金網の外からウサギを眺めた。
その辺りに生えてる草をあげたりして、
ウサギのもぐもぐと動くクチを見ていた。

そうしたら、また、おちやらがやって来て、
俺に言った。

「若狭くんさ、クラスの友だちで一番好きなの誰？」
「...長峰くん」
そう答えた。

すると今度は、おちやらのやつ、
長峰くんのほうに行って同じことを質問した。

「長峰くんは、クラスの友だちで一番好きなのは若狭くんなの？」
「...。」

長峰くんは、金網の前にしゃがんだまま、
何も言わず、ずっとウサギに草をやっていた。

すると、また、おちやらが言った。
「ねえ、長峰くんは、クラスの友だちで一番好きなのは若狭くんなの？」
「...。」

長峰くんは何も言わない。
俺はドキドキしてしまってた。

「ねえ、一番好きなのは若狭くんなの？」
すると長峰くんは、こう言った。
「うん、そうだよ。若狭くんだよ」

それを聞くと、おぢやは
「ふーん、二人は仲良しなんだね」と言って、
どこかへ行ってしまった。

俺は内心、ほっとした。
違う、って言われちゃったら、
どうしようかと思ってた。

こうして長峰さんと仲良くなってから、
俺は学校でイジメられなくなった。

学校が終わると、
自分の家とは方向が、まったく違うのに、
毎日、長峰さんと一緒に帰る。

長峰さんと一緒に帰れば、
待ち伏せされることはないから。
イジメられなくて済むから。

長峰さんの家は遠くて、
小さな林を三つも抜けて、
ようやく、そこに長峰さんの家が現れる。

二階建て、屋上があって、
キレイな家で、きれいなお母さんが、
お菓子を出してくれた。
お父さんは、いい会社に勤めているのか、
役員なのか、そんな感じの家庭だった。

「昨日、窓を開けて寝てたらさ、
こんなのが飛んできた」と言って、
長峰さんは大きなカブトムシを見せてくれた。

わあ、いいなあ、と思った。

こうして夕方、長峰さんの家を出る。

三つも林を越えて、一人で家へ帰る。

辺りが暗くなって、こわくて、こわくて、走って帰る。

いつも、こうして帰り道は、すごくおっかなかったんだけど、

それでも毎日、長峰くんの家へ遊びに行ったんだよね。

これが俺の小学校四年の頃の毎日。

いつしか、また季節は変わって、いつの間にか暑い夏がやってきていた。

夏休みになって、

相変わらず長峰くん、茂と正巳たちと遊びまわり、

夕方、腹を減らせて帰ってくると家の前にシボレーが停まっていた。

久しぶりに、またオヤジが戻ってきていた。

また何か言われて殴られんじゃないかと、

おそろおそろ家に入ったんだけど、なんだか妙に機嫌がよくて、

「おまえ夏休みだろ、小田原に連れてってやるから」と。

そうしてオヤジの車に乗かって、

また小田原の別荘へ。

親父のシボレーに乗って、

大宮から東名高速を、ずっと車を走らせて、

やがて大通りを右に曲がって細い通りに入って、

小田原の別荘が、そこにあった。

ここは酔っ払いのゲロ、すっぱい小便、大便の臭いなんかない。

花、土、木の匂い。

自然の清々しい匂いに包まれていた。

門を開けて入ると庭があって、

三畳くらいの大きな檻の犬小屋が二つあって、

そこに大きなシェパードとドーベルマンがいた。

まだ子どもだったから何もわからなかったんだけど、

ただ初めてこの家に入ったとき、

オヤジの匂いがして、ぞっ、とした。

外は清々しい匂いに包まれているのに、

この家のなかは、

オヤジの臭いがした。

オヤジの首筋の臭い。

この家のなかでも、

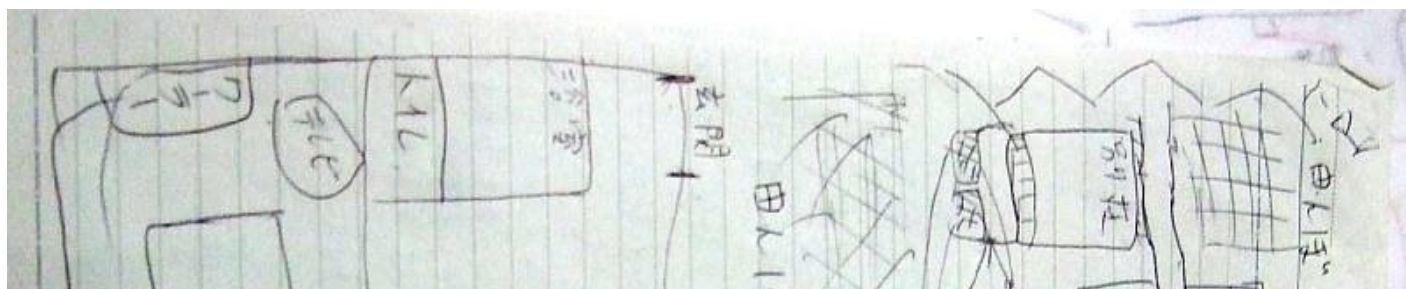
オヤジが生活してるというか、

息づいているというか、そんな感覚がしてた。

平屋だけど新しい家で、部屋が三つあって、

玄関から入ると流し台、冷蔵庫、大きなテーブル、

浴室、トイレがあった。



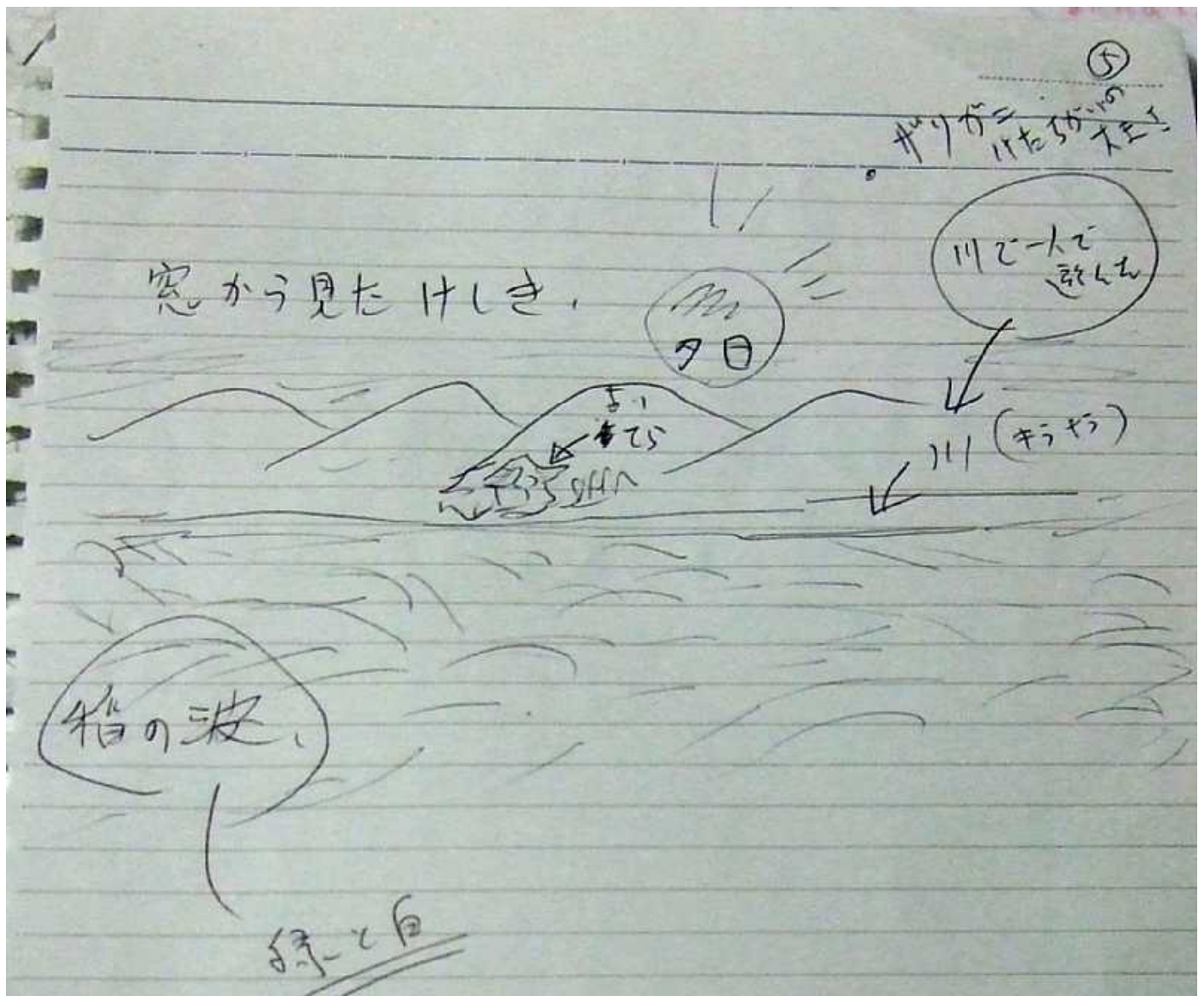
今から考えると多分、ケイコさんは30代くらいだったような気がするんだけど、その時は「おばちゃん」としか呼びかたが解らなかった。

小田原の別荘では、よく一人で川へ遊びに行った。

これまでも荒川で、よくザリガニを捕りに行ってたんだよね、でも、こっちのザリガニはさ、こーんなに、でかくてさ、うわあ、って。
こりゃ、すげえや、って。
そんなんで、ずっと一人で遊んでた。

夕方、この家の窓から外を眺める。
外は暑いのに、この家のなかはクーラーが利いていて、すごく快適で。

そんな部屋の窓から、俺はずっと外を眺めてた。



目の前、一面が田んぼで。
向こうのほうに、いくつも山があって。
夕日がきれいで、川がキラキラ光ってて。
山の麓に古いお寺があって。
一面に広がってる稲が、風にゆらいで、
まるで波のようだった。

風が吹くと、ぱあっ、と、
稲穂の緑が波のように揺らいで、
裏返って白に変わって。

緑と白にゆらめく稲穂の波を、
いつまでも、ただ、じーっと眺めてた。

ここは天国みたいなところだ、と思った。
俺が、いつも暮らしてる家とは、
まったく違う、優雅で贅沢な生活があったんだ。

ケイコさんとも打ち解けて、
おばちゃん、おばちゃん、と呼んで慕った。

ケイコさんは、とってもやさしくしてくれた。

「ひろくんはお肉が好きなんだってね」
そう言って、豚肉をケチャップで焼いた料理を作ってくれた。
すごく美味しかった。

でも、この日はオヤジは、また酒飲んで、
酔っ払って機嫌が悪くなってきて、
いつものように俺は殴られそうになった。

そしたらケイコさんが、
「やめて！やめて！やめて！お願いだからやめて！」と
オヤジを止めてくれたんだ。
もう、ものすごい勢いで身体を張って。

うれしかった。
オヤジに殴られるのを止めてくれた人は、
このケイコさんが初めてだった。

オヤジは散々、怒鳴り散らして、
シャワーを浴びに浴室へ。

するとケイコさんは、俺にこう言ったんだ。

「決して悪い人じゃないんだけどね、
酔っ払うと、あんなふうになっちゃうから...」

家の母ちゃんも、ケイコさんも、
オヤジに殴られてきたんだなあ。

ドーベルマンはこわかったけど、
シェパードは人懐っこくて、
そんな犬と遊んだり、ザリガニを捕ったりして、
美味しい料理を食べて、
そんな生活を二週間くらい過ごして、
また俺は、いつもの大宮のボロ家へ。

夏休みが終わって、学校が始まった。
でも以前とは違って、
この頃は学校へ行くのも楽しくなってきた。

毎日、長峰くんと一緒。

でも、いつも、おちゃらのやつが、
「先生、若狭くんは、いつも通学路じゃない道を
歩いてるんですよ」って、また先生に言いつけやがって。

おれ、いつも長峰くんの家のほうへ、
一緒に歩いて帰るもんだから。

「おとといも、通学路じゃないところを歩いてました」

それ聞いて小林先生から
「若狭くん、立ちなさい。おととい学校の帰り、どこで道草くってたの？」
と言われる。

いつも「忘れました」とか言って、
適当に、ごまかしてて。

それが、ある冬の日。
長峰くんとの帰り道、
あまりに寒くて、

向こうの川は凍ったかな、って。
見に行こう、ということになってね。

そしたら、もう川の水面がびっしり凍ってて。
歩いても割れないかな、って、
あ、割れないぞ。
もっと向こうまで行ってみよう。
もう一歩先に行ったら割れちゃうかな。
わっ、ひび入ったぜ、危ない危ない、なんて。

そんなことして遊んでて。

それを、また、おちゃらのヤツが学校で
「若狭くんは、この前、また通学路じゃないところを歩いてました」って。

また俺、立たされて。
小林先生に「なにやってたの！」って言われて。

俺、いつもみたいに「うーん...」って、
忘れたフリしてたら、向こうのほうから長峰くんが小さな声で
「川だよ、川...」って、そう言うのよ。

もう、そんなの、わかってんだって、って、
そんなふうには言えないし。

「う、う〜ん...」って唸ってるだけで。

そしたら、また長峰くんが、ささやき声で
「川だよお、凍ってた川...」って言っちゃうんだよ。

それ小林先生に聞こえちゃって
「なに、川に行ったの...あんたたちは、そんなことしたの！」って
全部バレちゃって怒られちゃってね。

ばっかだよなあ....。

でも、そんな小林先生に、
俺たちは認められたこともあったんだ。

図工の授業で、小林先生がみんなに言う。

「なにか動物を作りなさい」

粘土で動物を作る、という授業。

みんなそう言われて動物図鑑なんかを見て、
どんなの作ろうか「これがいいや」なんて話してて。

そしたら長峰くんが恐竜図鑑なんか持ち出してきて。

「おい、恐竜だぜ、恐竜つくろうよ」

「かっこいい！」

「これ、いいじゃん」

「おお、いいねえ、いいねえ！」

でも、ちょっと考えて俺が

「...でも、恐竜は動物と違うんじゃないか？

なんか、また言われんじゃないかなあ」なんて長峰くんとしゃべってて。

そうして長峰くんが図鑑の下の小さい説明書きを、よく読んで

「...最古の動物である...って書いてあるぜ。肉食動物である。
ほら動物だよ。なんか文句言われたら、これ言ってやろうぜ」

長峰くんがそう言って、

二人でそれぞれテラノザウルスつくって。

テラノザウルス二頭。

おちゃらが、また、ちょっかい出してきて

「あんたたち、また、そんなことやってる」って。

他のグループのくせに、また、そんなことばかり言って。

作り終えて、一人ずつ教壇の前へ持って行くわけですね。

そこで小林先生が一人ずつ点数を点ける。

そうして俺たちの番。

もう自分で言うのもなんだけど、ものすごい、
素晴らしい出来栄なわけですよ。

もう、こんななっちゃって歯剥いちちゃってね、
好きなことやってるから、すごい迫力あってね。

そしたら、おちゃらが

「それ恐竜ですよ、いいんですか先生！」って。

だから俺たちは「最古の動物。肉食動物だって、図鑑に書いてあるから」って。

「動物ですよ、先生」って。

そうしたら小林先生、渋い顔しながら、
こーんなしながら俺の恐竜を眺めて
「まったくもう...これ、つくったの.....5やる」って。

二人共、最高点の5もらった。

俺、学校で5なんて貰ったの初めてだったから、
生まれて初めて貰った5だから、
もう、うれしくて、うれしくて。
家に飛んで帰って「アユミ！これ5貰った、5だよ、5！」って。
粘土に赤丸で5って書いてあるとこ見せて自慢して。

「よかったね！」

ねえちゃんも喜んでくれて。

初めて小林先生に俺は認められたんだ、って。
そんな感じだったんだよね。

もちろん母ちゃんにも自慢した。

「かあぼう、俺、学校で5取ったよ、ほらほら、これ！」

すると母ちゃんは、やさしい顔で
「そう、すごいね、よかったねえ」と、ほほ笑んでくれたんだ。
「ああ、そうそう。今月の二十二日に社員旅行、行ってくるからね。
また、おじさんの家で待ってなさいね」
「そうなんだあ。今年はどこ行くの？」とアユミが訊ねた。
「今年は網代。熱海の近く。アジの開き、買ってきてあげるから」
「早く帰ってきてね」
「うん」

母ちゃんは、こうして年に一回だけ、
一泊二日の社員旅行へ。
その度に俺とねえちゃんは一晩だけ、
大宮駅近くに住む母方の家に預けられた。

この時は冬だった。

バスで『大宮駅西口』へ出て、
そこから歩いて線路沿いに、その家はあった。

木造の古い家だったけど、

広い庭があって十二畳もある部屋が二つもあった。
小さな馬小屋があって、
俺がもっと小さい頃は、まだ馬がそのなかにいたんだけど、
この頃には、もういなかった。

昔、この家は荷馬車とか、そういう商売をしていたらしい。
でも、この家の玄関に入って、
そこの広い庭に犬がいて。

この犬が放し飼いなもんだから、
しかも、すごくワンワン吠えて、
それが怖くて、俺とねえちゃんは、
いつも外に出るときは、二人してお互いに、
しがみつकिながら玄関の外へ出なきゃならなくて。

俺もねえちゃんも、
その犬には何度も噛まれた。

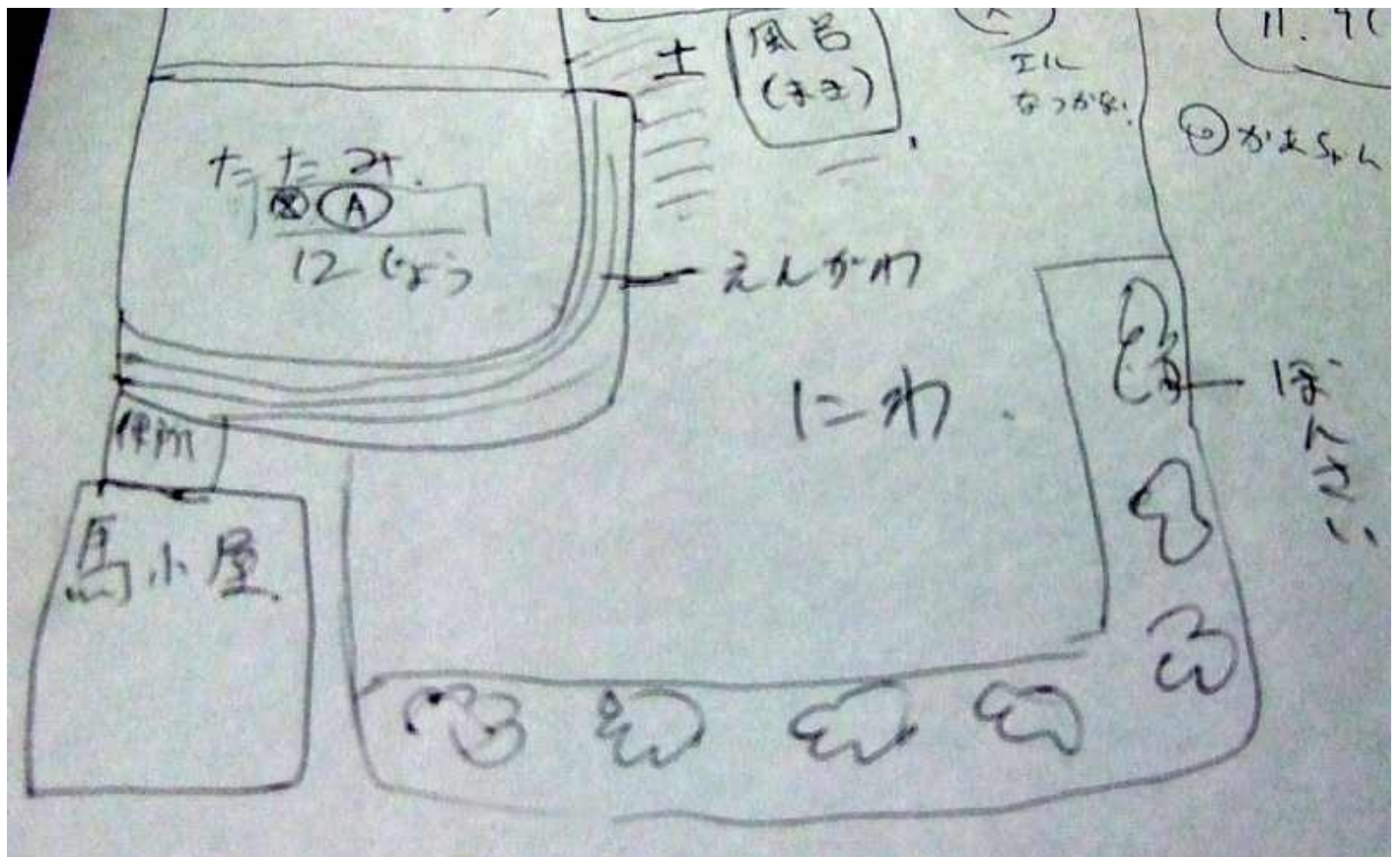
でも、この家の人たちは、とっても、おだやかで、
みんな優しくしてくれた。
でも俺たちは、よその家では内気だったから、
二人して、ただ、おとなしく隅のほうに縮こまるように過ごしてた。
自分からは誰にも話しかけられなかった。

いつもニコニコしてる、
おだやかなじいちゃんがいて、
今こうして振り返って考えてみると、
言語障害があったから一度、脳溢血か何かで
倒れたことがあったんだと思う。

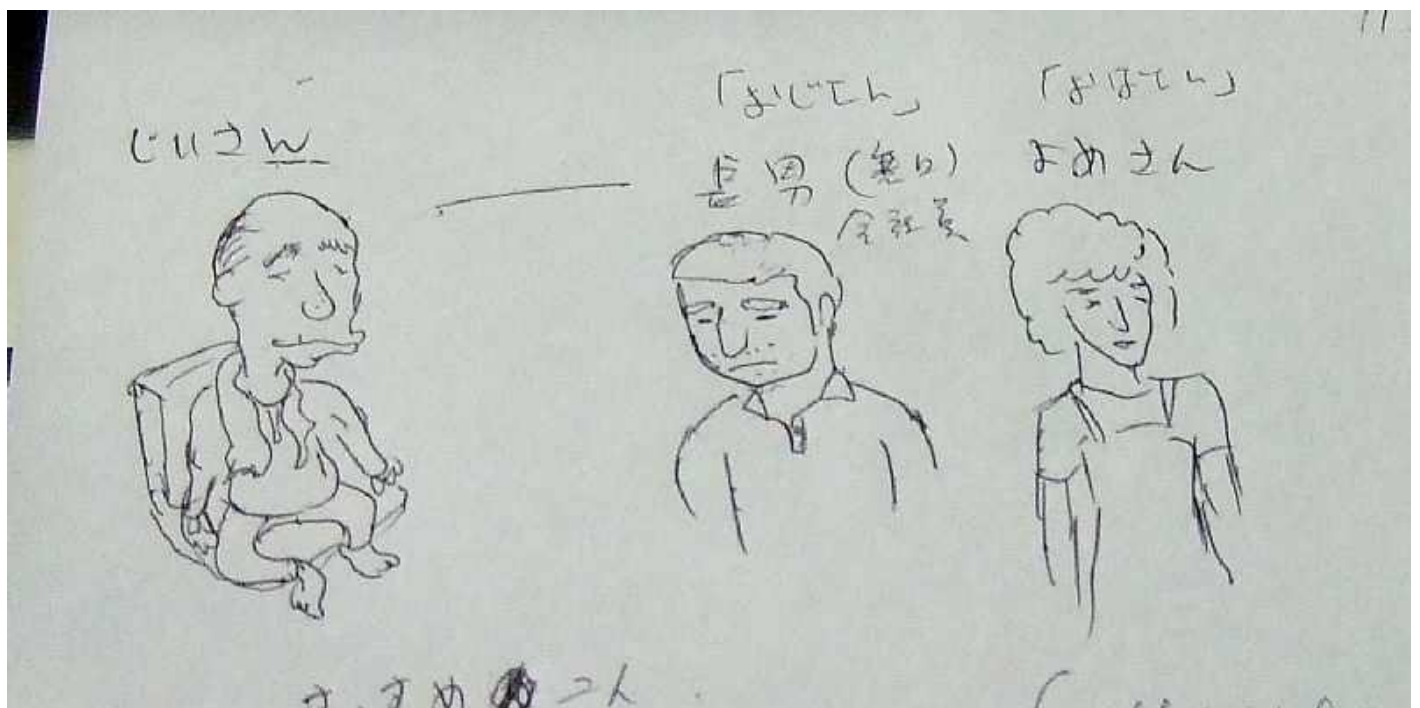
このじいちゃんが、いつも寝る前、
小鍋で暖めた玉子酒を飲むんだけど、
それを見て、飲んでみたいなあ、
美味しいのかなあ、と感じてた。

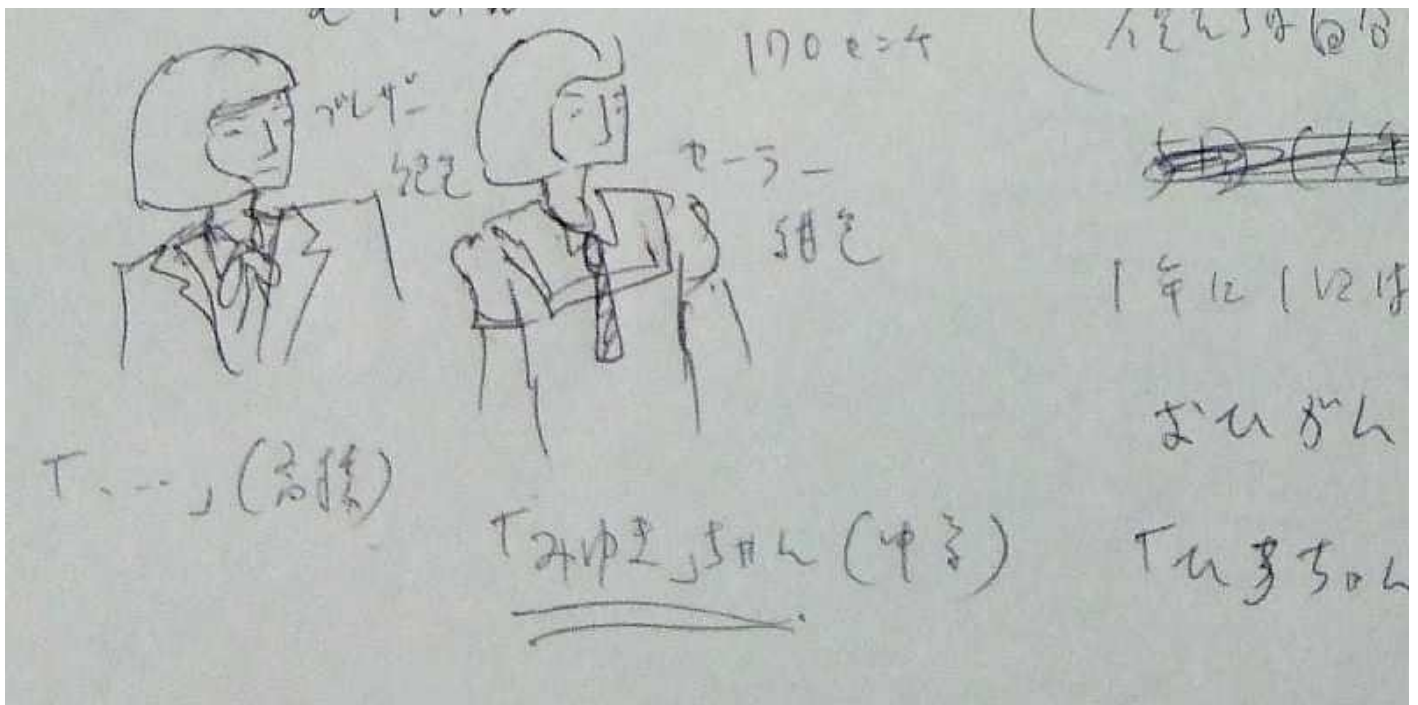
この家には長男のおじさん夫婦がいて、
おじさんは会社員で無口で、
おばさんも、おとなしい人だった。





娘さんが二人いて、
 この二人は背が高く身長百七十センチくらいあった。
 上の娘さんは当時、高校生くらいで、
 紺色のブレザーの学校の制服を着てて、
 もう俺たちみたいな子どもと遊んでくれるような年頃ではなかったんだけど、
 下の中学生のみゆきちゃんは明るくて、
 紺色のセーラー服姿で学校から帰ってきて俺を見つけると
 「あ、ひろちゃん、大きくなったねえ！」と声をかけてくれた。





みゆきちゃんは「散歩、行こうよ」って、
アユミと一緒に近所の商店街に連れてってくれたり、
線路の近くの川へ遊びに行ったり。

その川の近くに石炭の山があって、
なんか、うれしくなって登ったりして、
それを見てみゆきちゃんは「よごれるよおー！」って、
そんなふうに、よく一緒に遊んでくれたっけなあ。

この家のことを思い出すと、
石炭と薪の匂いがよみがえってくるな。

ごはんが、ものすごく美味しくて、
お米がつやつやしてて。
おかずは天ぷら。
ニンジン、レンコン、ナス、かき揚げなんかが山盛りで。
焼魚とかもあって、もう大きなちゃぶ台の上いっぱい豪華だった。

「おかわりは」「もっと食え」と言われながら。

朝食は七時頃、鯉節を削るシャ、シャ、シャッという音が聞こえて。
味噌汁の出汁の匂い。
目玉焼き、焼魚、つやつやの朝ごはんも、たまらなかった。
みんなでご飯を食べて、
おばさんと、おねえちゃんたちは土間で食べてた。

こうして朝食を終えて、

おじさんは会社へ、おねえちゃんたちは、
それぞれ学校へ。

みんな居なくなって、
俺とアユミ、じいちゃんの三人だけになって。

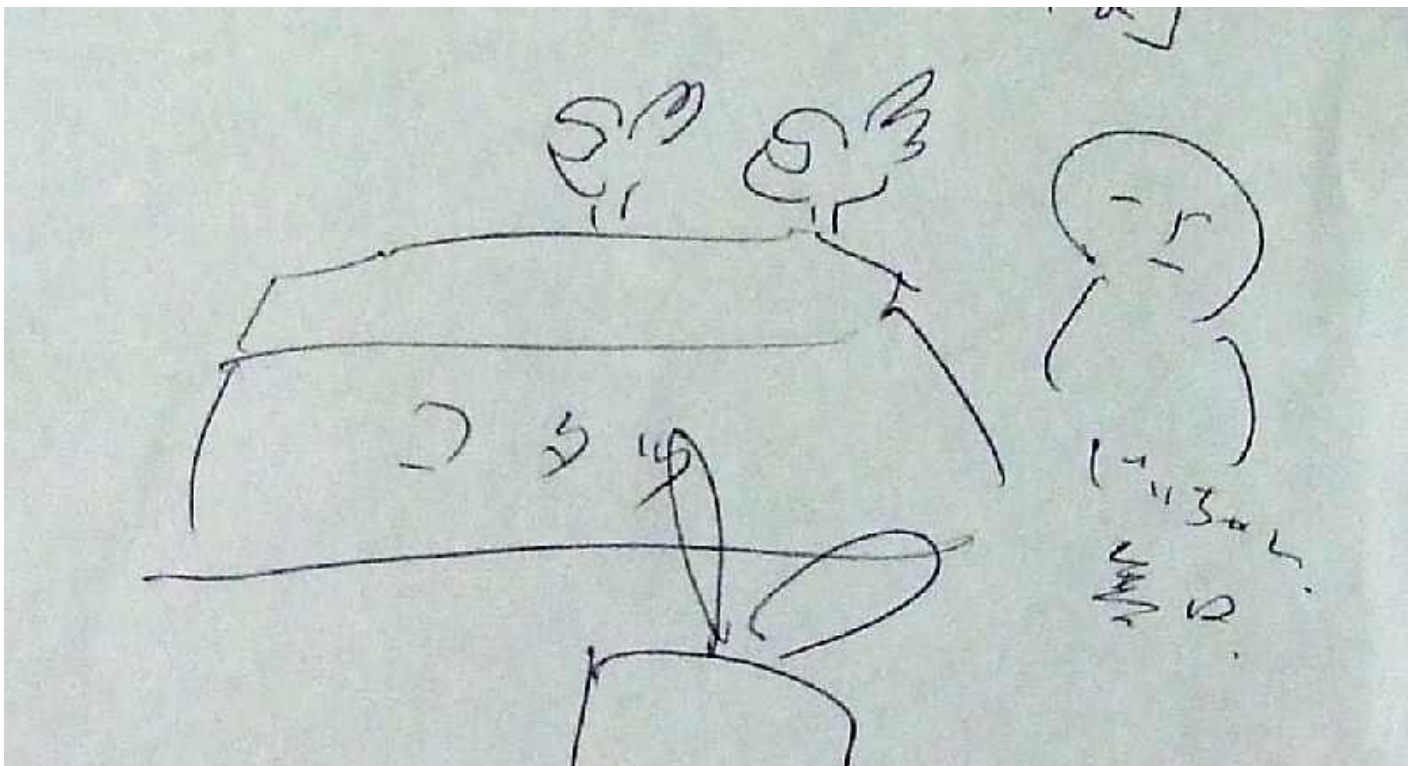
こたつに入って、
じいちゃんは白黒のテレビで笠谷選手のスキージャンプ競技を見ててね。
俺とアユミは退屈で退屈でさあ、
二人して、
ねえ、おじいちゃん、おこづかい、くれないかなあ、って、
こそこそ話してて。

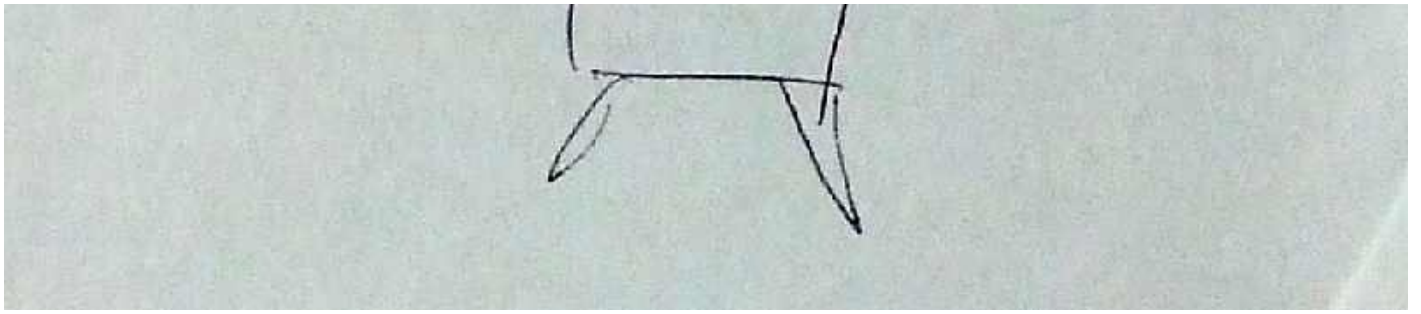
いつも、じいちゃんお小遣い、くれたから。

「早くお小遣いくれないかなあ」
「言ってごらんよ」
「言ってみなよ」
「言えないよ」って。

だからアユミと、コタツの下に身を屈めながら、
二人で、そーっと、
お金のマークを作った指をコタツの上に出してみたりして。

でも、じいちゃん、
全然、気づいてくれなくて。
ずっと無言のままテレビ観てたんだよなあ。





この家には、こうして年に一度、
それから法事のときにも、
親戚みんなで集まったりしていた。

おだやかでニコニコしているじいちゃんは、
でも威厳があって、いつも、いちばん上座に座ってた。

おじさんも、おだやかに笑ってたけども、
無口でおとなしくて、
親戚たちが集まってるなかで、
おばさんは世話しなく、
ただ黙々と料理を運んでいたことを憶えてる。
この家も、もう今はなくなっちゃってね、
マンションになってて。

たしか、上のおねえさんか、
下のみゆきちゃんが大家さんみたいな感じで、
住んでるんじゃないのかなあ。

時代、だよな。
今から約四十年前、1970年——昭和40年代、
もう馬車なんか必要じゃないし、
産業も社会も、町もみんな、どんどん変わってっちゃったよねえ。

あの頃、みんな貧乏だったけど、
なんか希望だとか人情だとか、元気があったあの頃、
俺が小学校四年のとき、
うちの前にあったボロの『山乃内食堂』が取り壊されて、
なんにもなくなっちゃって。

そうして、いつもターザンごっこやってた空地が整備されて、三階建ての新築建物の建築が始まったんだ。

新『山乃内食堂』ですよ。

すんげえ、こんな三階建てになっちゃうのかよお。

「うちのパパ、すげえだろ」って正巳は言う。

茂も正巳も、こんな貧乏で、

ツギハギのボロで汚い服着て泥まみれなってるのによお、こいつら昔から、自分の家の父ちゃんと母ちゃんのことを「パパ」「ママ」って呼ぶんだよね。

なんでなんだろうなあ。

なんか、いつも不思議に思ったんだけどね、そうだったんですよ。

そうして秋の日の夜、まだ建築途中の建物の足場を登って、三階から通りを見渡して、夜空を見上げて。

すげえなあ、山内のおじさん、がんばったんだなあ、って。

そして冬の頃、ついに、この『山乃内食堂』は完成したんだ。

大きな電気の看板が付いて。玄関は自動ドアですよ。自動ドアを開けて入ると赤い足吹きマットが置かれててね、一階は四十～五十人くらいお客さんが入る大きなフロアーで、床は水色のPタイル。

自動ドアの上には、なんとカラーテレビだよねえ。大きなカラーテレビが置かれてんだよねえ。

赤い客席テーブルがフロアーにいくつも並んでて、その向こうに巨大な冷蔵庫。その横に大きなクーラーボックスがあって、水の中にジュースとかビールがびっしり並べられてて。

壁には巨大なクマデが飾ってあって、
その横に羽子板なんか、いくつか並んで飾られててね。

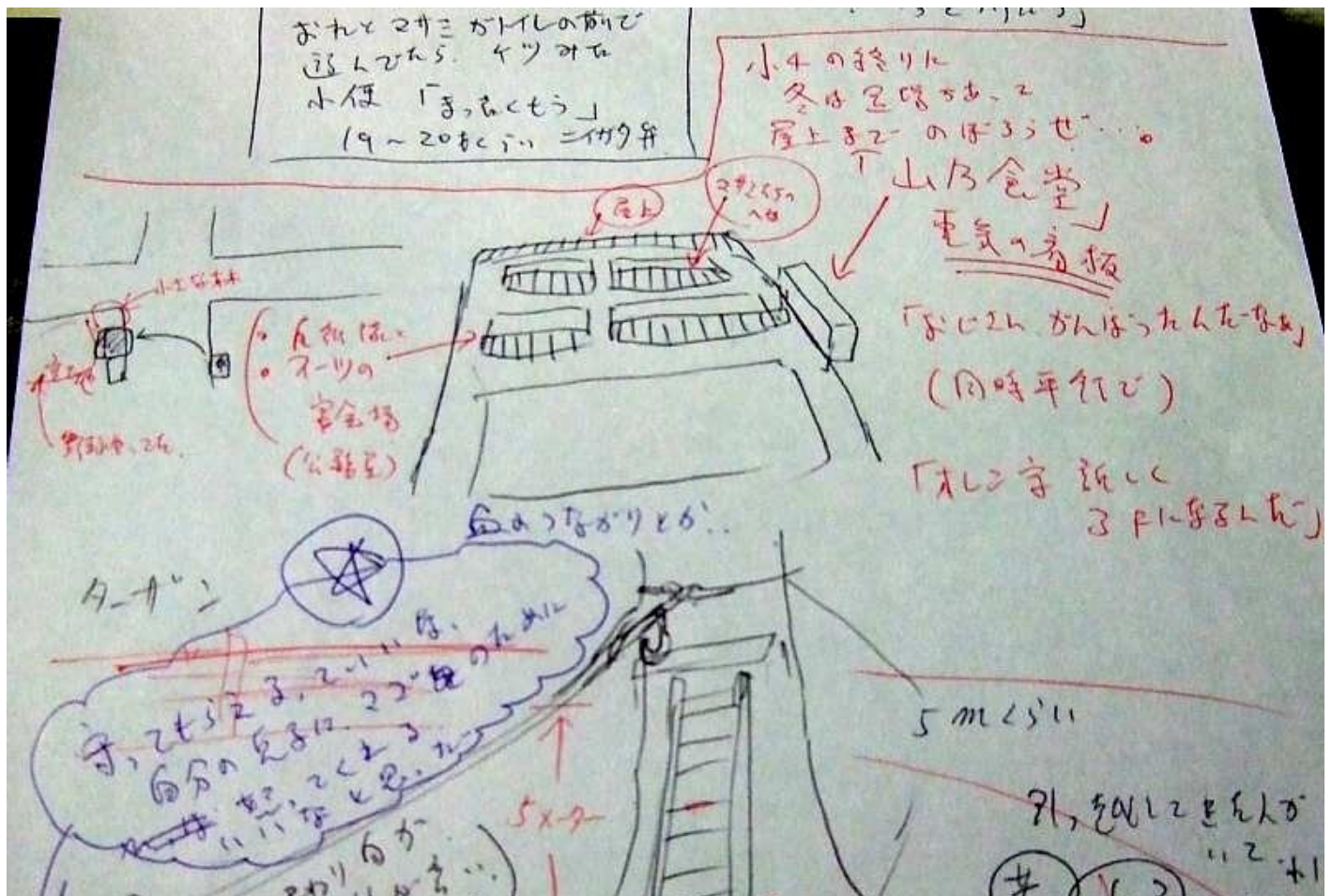
『スプライト』『コカコーラ』のレギュラーサイズ。
『ミリング』『ファンタグレープ』『オロナミンC』
お米屋さんしか売ってない『ブラッシー』なんてジュースもね、
あってね。

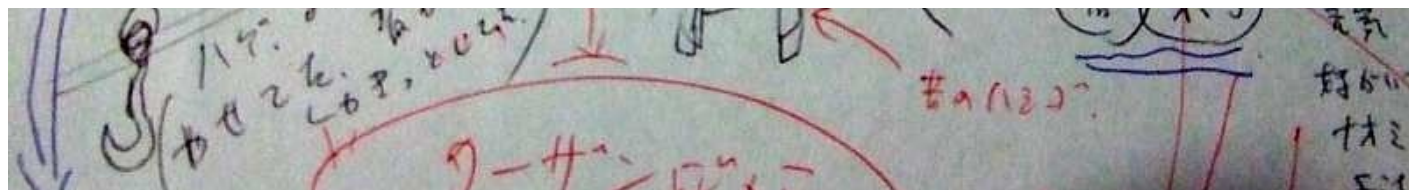
当時、テレビでコマーシャルやってた『ミリング』がねえ、
飲んでみたくてねえ。

でも「ちょうだい」なんて、
とても言えなかったよ。
たしかに元気な子どもだったけど、
俺なんか内気だったんだよねえ。

そういうの欲しくても、
目の前にあってもね、
「ちょうだい」なんて、とても言えなかったなあ。

二階は宴会用の客席が広がっていて、
三階に家族が住んでた。





第三章-1 出会い。そして別れ。

すごく貧乏で、元タクシーの営業所という
ボロいトタン屋根の家に住んでいて、
いつも腹を減らしてて、
イジメもあったりして、
でも、そんな生活のなかでも
母ちゃんとねえちゃんと三人家族は仲良く過ごし、
クラスの長峰くん、近所の友だちとも楽しく遊んで、
そんな小学校一年から四年生まで、
時はまさに風のように過ぎてゆき、
俺は小学校五年生に進級していた。

すると長峰くんとクラスが別々になってしまった。
そしたら、またイジメが始まったんだよ。

俺が通ってた小学校は、
日本一のマンモス校で、
ひとつのクラスが四十～五十人くらいで、
十クラスもあったから、
クラスが変わっちゃうと、
なかなか会えなくなっちゃうというか。

また俺はクラスで一人ぼっちになってしまって、
そうして校庭を眺めると、
長峰くんには、また新しい友だちが出来て、
楽しそうに遊んでるわけよ。

下駄箱のところで偶然、会ったりして
「おう、元気？」なんて、
いつもと変わらず声をかけてはくれるんだけど、
そうして俺も「うん」なんて返事するんだけど、
なんか寂しかったよねえ。

そんな頃、
正巳が近所の柔道場に見学に行く、と言う。

俺も一緒に、
山内のおばさんと正巳と三人で見学に行ったんだ。

そうして考えに考えて、
よし、やろう、と。

テレビで『明日のジョー』とか『タイガーマスク』だとか、
『柔道一直線』なんかを観てて、
俺なんかも憧れてて、
これは俺も、もう、やるしかない、って。

母ちゃんに頼み込んで、
結局、入門することになったんだ。

体が大きかったから、
俺はめきめき強くなって行ったんだ。

柔道の先生はキリリとした、すごくカッコイイ人でね。
この先生がね、俺をすごく、かわいがってくれて。

「おう、いいぞ、若狭くん！」ってね、
いつも、ほめてくれて。
あれはねえ、うれしかったなあ。

だから俺は先生を独り占めしたくって、
わざと遅刻して道場に行ってたんですよ。

「なんだ若狭くん、またこんなに遅くなっちゃったのか。
よし、じゃあ、また先生が稽古をつけてあげるから。
さあ、早く、着替えて、着替えて」って。

こうして先生を独り占めしてたんだよね。

柔道の道場では、同じ年頃の生徒で一人、
いつも自慢話ばかりするヤツがいてね。

「ウチは金持ちなんだ。ウチの父ちゃんはすごいんだ」って。
本当に金持ちで、すごい家に住んでるヤツだったんだけど、
柔道の先生は、そいつを正座させてね。
先生も正座して、そいつに説教して。

男というものは、そんな自慢話しなんか、するもんじゃない、って。
そういう話をね、そいつにしてて。

道場の裏庭では、いつも先生が干していた白いフンドシが、
風になびいてて。

カッコいい、って思ってた。

家に帰って、かあちゃんに、
白いフンドシ作ってくれ、って、せがんでね。

エプロンの紐と手ぬぐいでフンドシ作ってもらって、
それから俺も毎日、白フンですよ。

俺は背負い投げから、
そのまま袈裟固めにするのが得意技になって、
先生は「いいぞ、若狭くん！そのまま、ほっぺたをくっつけてしまえ！」って、
俺の毎日には本当に充実してきたんだ。

そんな、ある日、
かあちゃんが俺とおねえちゃんを、
『山乃内食堂』に連れてってくれた。

裁判所から帰ってきたかあちゃんは、
ため息をついてた。
でも俺たちには何も言わなかった。
でも俺たちも、どういうことか、わかってたんだよ。
離婚裁判。
当然だと思うよね。

こうして俺たちは初めて、
新しい『山乃内食堂』で食事をしたんだ。

もう、嬉しくて、嬉しくて。

「なに食べるの？」って言われて、
ついに俺は「焼きソバ！」って言えたんだよ。
あの、ずっと食べたかった山内のおじさんの焼きソバ。

しこたま匂いだけがされ続けてきた、
あの焼きソバがテーブルの俺の目の前に置かれたんですよ。

もう、かあちゃんやねえちゃんが、
なにを食べてるのかすら気づかない、
そんな感じだったです。

それに『ミリンダ』も！

「うめえ！」

思わず叫んでたんじゃないかなあ、
心のなかの叫びだったのかなあ。

ギョウザも、もうバンバン出てきちゃってねえ。

今から考えるとね、
あのギョウザは、
山内のおじさんからのサービスだったんじゃないのかなあ、って。

カウンター席の向こうにある厨房のなかから、
おじさんは何も言わず、
大きなフライパンをゆすりながらね、
ただニコニコした顔で、こっちを見てたんだ。



かあちゃんは、いつも通り、

俺が食べてる姿を眺めてて。

「おいしい？」って聞くんだよ。

「うまいよ、当たり前じゃないか」って、

俺がそう言う「そう、よかったね」って微笑んでた。

それは、秋の季節が間近になってた頃のことだったんだよ。

それから、しばらく月日が過ぎて....

ある朝、おねえちゃんが一足先に学校に行って、

俺がごはんを食べ終えて、

学校へ行こうと玄関に立ったとき、

そこに、親父が扉を開けて入ってきたんだ。

こんな朝ばらから、

もう、ぷんぶん酒臭くて。

ものすごく酔っ払ってて。

「おい！ヒロユキは渡さねえからな！」って、いきなり怒鳴ったんだ。

俺はびっくりして、ただ親父の顔を見詰めてた。
俺は――今までも、それからも、
自分からこの人を「父ちゃん」「お父さん」「親父」と
そんなふうと呼んだことがなくて、
言われたときだけ「父ちゃん」「お父さん」と
言ったことはあるんだけど。

だから、こうして原稿にするとき、
この男の呼び名を、どう書いたら良いのかわからなくてね。

そうして、この、父さんというか、親父が、
玄関先に立ったまま、こう言ったんだよ。

「なあ、おまえは俺についてこい。
今日はおまえ学校行かなくていいから。
男二人で生きるんだよ。
母ちゃんも子ども二人は大変だから」

「どうせ、おまえは学校でイジメられてんだろ。
父ちゃんいないとか。
男はイヤだ、って言わなきゃならないときがあんだよ。
オレは学校いかない、って言ってみろ！」

そう言われて、俺は思わず言った。

「俺は学校行かない！」

するとパラパラッと、敷居に涙が落ちた。
親父が泣いている。

「おまえの気持ちは、よくわかる」

こんな、だらしのない親父。
でも俺は、この親父を助けなきゃいけない、と思った。
かあちゃんも大変だろうし。
それよりも、この親父への情けが、あった。

俺がいなきゃ、この人、だめになっちゃうんじゃないか、
という情け。

心のなかで、俺は父ちゃんと生きるから、
かあちゃんは、おねえちゃんと一緒に幸せに生きろよ。
俺みたいにギャーギャー言ってるのがいないほうが、いいんだ。

だから俺は、

「うん」と答えたんだ。

かあちゃんは、ただ黙って立っていた。

「おまえを一人前の、男のなかの男にしてやる。
オレはこんな飲んだくれの男だけど、
おまえはオレと違って根性がある！」

親父はボロボロ泣いてた。
かあちゃんも泣いていた。
俺も泣いた。

「なあ、あの笛、吹いてくれよ。
おまえが、よく吹いてた笛」と、
おとなしくなった親父はそう言った。

親父は出て行った。

夕方になって、おねえちゃんが帰ってきた。

「ほんとうに、おとうさんのところへ行くの？」
おねえちゃんは、そう言った。

「もう、ひろちゃんは決めたんだから」と、かあちゃんは答えた。

「俺は父ちゃんのところへ行く」

「……。」

そうして、この二ヵ月後、
この家から、かあちゃんとおねえちゃんは出て行った。

浦和のほうの親戚の家へ。
小さなトラックが来て、
二人の荷物を積み込んだ。

親父は朝からビール飲んで、
ウイスキーのポケット瓶を飲んで、ちゃぶ台の前に座って。
黙ってハイライトを吸ってた。

みんな何も言わず、
ただ黙って三人で、どんどん荷物をトラックに詰めて行って。

後から聞いた話しなんだけど、
裁判ではこれまで通り、
かあちゃんとおねえちゃんと俺と三人で、
これまで通り、この家に住んでて良い、
ということになってたんだけど、
親父が強引に、こうやって、かあちゃんを追い出した。

でも、この時、そんなことを知ってたとしても、
やっぱり俺たちは、こういう結果になっていたんじゃないのかな。

荷物をどんどん運んでるとき、
ああ、もう別々に暮らすんだ、と思った。

これは、もう自分で決めたことなんだから、
絶対に泣いちゃいけないって思って、
荷物を運びながら、
かあちゃんとおねえちゃんの顔を見ないようにしてた。

誰も何も言わなかった。

こうして、かあちゃんとおねえちゃんも乗せて、
トラックは去って行った。

夕方、「寿司食い行こう」と親父は、そう言った。
ここから、ちょっと離れた寿司屋。
ずいぶんと長いこと板さんと話してて。
俺はその横に、ぼつんと座って。
寿司はちっとも、おいしくなかった。

こうして、親父との暮らしが始まって行ったんだ。

俺は発砲スチロールを貰って、
それで大きなマジンガーZを家の中で作ってた。
一人で夢中になって。

そしたら酔っ払った親父が帰ってきて、
おまえ何作ってんだ、と。

なんだ、これ。
脚がちんばじゃねえかよ。
こんな、ちんばな脚なんか作ってたらな、
ハンパな人間にしかねえんだよ、と。

そうして怒鳴り散らして、
せっかく作ったマジンガーZ、
ぶっこわされちゃった。
すごく、つらかった。

おい、飲み行くぞ、と、
そうして、また連れまわされて。

親父との生活は、まさに悲惨だった。
一年間、ゴミを出さなかった。

ちゃぶ台の横に、
それぞれベージュ色、クリーム色の
海岸で使うビーチの座椅子。

カジヤマ・ケイコさんが使ってたベージュ色のビーチの座椅子を
俺が使ってた。
周囲はゴミの山。

元・車庫だったところもゴミの山。
そこに『来々軒』と書かれた大きな看板があって、
同じように使っていない井、ギョウザの皿なんかが山積みになってて。
たぶん親父が商売をやろうとしたんだろうけど、
そういうものですよ。

そこもゴミが山になってて、
ネズミがチューチュー、走りまわってた。

家のまわりは例のように酔っ払いのゲロまみれ。
小便、クソだらけ。
一度も掃除なんかしないから、ひどい有様だった。

洗濯なんかもしないから、

俺の服は毎日同じで、ひどく臭かった。

俺に「服を買ってやる」と言う。

大宮の駅前のジーンズ・ショップで、

ジーパンの上着とズボンを買ってくれた。

これが後々の俺の冬に着る服になるんだけど、

みんなから「フランケンみたい」と言われることになるんだけど。

それにしても、このお店でも、

女の店員とくっちゃべってて、

俺は金持ちで、すげえんだ、って口説いてやんの。

今こうして思い出しても、ほんとに、しょうがねえ親父だったよなあ、
と思う。

親父は毎晩、飲み歩いてた。

毎日、俺は飲み屋に連れてかれて、

ある日、「いかねえ」と言ったら、

親父はドアをバーンッと蹴っ飛ばして、

もう、ものすごい剣幕で怒った。

「オレが行くのに、行かねえ、ってのは、ねえんだよ！」と、

殴られて、また少し離れたところのスナックへ。

親父は自分は成功者なんだとか、

こいつはオレの息子なんだ、とかしゃべってて。

俺はその隣で、ただ、もう眠い目を擦ってて。

弟さんがやってるタクシー会社の売上があったから、

そこからカネを貰って、

だから、まったく働かないのに、

こうして飲み歩いてた。

遊びに来てた正巳か茂に聞いたらしく、

山内のおじさんがウチに来て、

丼や皿を売ってくれないか、と言いに来たことがあったんだけど、

親父は「いやあ、これは売り物じゃないから」と断った。

なんか、そういう格好つけるところがあるから。

こんなにカネがない、ってのに。

そんなカネも全部、飲んじまって。

本当に全然、カネがなくて。

だから家から離れたラーメン屋とかに行って、
お勘定になると「あれ、おまえに財布、預けたじゃねえか」って。
「あ、ごめん、忘れてきちゃった」
「えー、しょうがねえなあ。今度、持ってくるからツケといて」

なんて、そんな無銭飲食、何度もやることになっちまった。

夜中、いつものように連れられて、
酔っ払って、ふらふら歩いてる親父が、
夜空に向かって
「かじやまけいこー！アイラブユー！愛してるぞおー！」って叫んだ。

酔っ払ってケイコさんのことを、
もう死んじゃうんじゃないか、ってくらいに、
本当にひどく殴ったらしい。

ケイコさん、そのまま家を出て行っちゃって。

その次の日の朝、
ケイコさんの父親が鳥かごを提げてやってきたんだって。

「あんたから貰った九官鳥、
タベネズミに食われて死んだ」

親父が前にプレゼントした九官鳥、
ずたずたになって死んでたらしい。
親父が、そう言ってた。

どうやら親父は、
カジヤマ・ケイコさんと別れて、
さびしくなっちゃったから、
こうして家に帰ってきたんだな、と思った。

でも母ちゃんは、それを許さなかった、というか、
許せなかったんだよね。

だから、こういう結果になったんだな、と。
そう思った。

そうして俺はというと、
学校では服とか体が臭いから、

また一層、イジメがひどくなって。
柔道衣も洗濯してないもんだから、
汚れて、すごく臭くて。



第三-3

この柔道場には学校の同じクラスのヤツで、
俺のことを、いつもイジメてるヤツも通ってきてたんだけど、
俺は柔道が強くなってきて、
道場でそいつと練習をしても負けなくなっていた。

そうして、いつしか柔道場で、
いちばん強くなった。

それで学校で、ある日、
ついに俺も、もう我慢できなくなって。
クラスの男たち全員とケンカした。

前の晩、『明日のジョー』とか観てて、
俺も、もうやってやる、やってやるぞ、って覚悟決めて。

教室の後ろ側の机を、
みんな前に押しやって場所をつくって、
一人ずつ、もうバンバン、背負い投げして袈裟固めにして。
もう全員やっつけたんだ。

これは俺の人生の大きな転機になったんだ。

その日以来、もう毎日、毎日、
ケンカですよ。

「おらあ！かかってこい！」って叫んでた。

背負い投げでバーンと投げ飛ばして、
そのまま袈裟固め。
別に関節を決めてるわけじゃないから、
相手がまいったしないと終わらないから、
じれったいんだけど、
もう柔道の先生に習ったことを、そのままケンカに使ってたよね。

相手の頬に、自分のほっぺた、くっつけてね。
こう、ぎゅーっと、抑え込み、やってたんだ。

そうして俺に対するイジメは終わった。

実に爽快な気分だった。
やっぱり男は強くなきゃ、
そうして勝たなきゃいけないんだ、って。
それを実感したんだよ。

ある日、「柔道なんか、もうやめちまえ」と親父から言われて、
そうして大好きな先生にも会えなくなってしまった。

たぶん柔道の月謝も払ってなかったんだろう。
仕方がない。

小学校六年になって、もう毎日、ケンカばかり。
もう、暴れまくってた。

そうしたら新しく変わった担任の男の先生が、
ある冬の日、
クラスの連中に、こう言った。

「おまえたちは、もう若狭にかかわるな。
先生を見てごらん、若狭をかまわないだろ。
みんなも若狭を相手にしちゃだめだ。
若狭は独自の生き方があるようだから。
先生は、ほっとくよ。
それが若狭のためだから」

そう言ったんだよ。

ショックだった。

俺は学校の先生に見捨てられたんだ、と思った。

ぽつん、と一人で歩いて帰って、
家の近くに作った野良犬の小屋に入って、
その犬を抱えて一緒に犬小屋のなかで。

寒くて、でも犬のおなかのあたり、
脚の付け根のあたり、
とっても、あったかくて。

ポロポロ泣いた。
そうしたら犬が、
俺の目を、ただ、ずっとぺろぺろ舐めてくれてて。

涙が止まらなかった。
辺りが暗くなって、
ますます寒くなって、
そんな夜、俺はこの犬と一緒に、
犬小屋のなかで眠った。

ある日、親父が弟さんを家に呼んで、
「こいつのためにもよお、頼むよ」と、
お金を無心してた。

でも、弟さんは家の様子を見て、驚いて。

「こんな家にいたらいけない」って。

こうして俺は小学校六年の頃、
弟さん——つまり、おじさんの家に預けられた。
唐突に親父との生活は終わったんだ。

転校して。
日進小学校から大宮東小学校へ。
ここはマンモス学校じゃなくて、

クラスが四つしかなくて。
わりと都会の小学校だから、あっちこちに小学校があったから、
一極集中じゃなかったから、
そういう小さな学校だったんだよね。

相談室で先生とおじさんが話してて。
こういう事情なんで、
私が預かるようになったんです、と話してて。
そうしたら扉の隙間から、
こうして、みんなが覗いてんの。

当時、転校生なんか、めずらしかったから。

その後、クラスで紹介された。
そうしたら、みんな集まってきた、
どうしたの、とか聞かれて。

ああ、ここでは真面目にやろう、と思った。
ケンカばかりしてたなんて、
そういう正体は隠そうと思った。

明るく、元気に振舞った。
みんなが、そうさせてくれたんだ。
みんなが、あたたかくて。

幸せな二ヶ月だった。

「おい、サンドぶつけやろう、やろう、早くこいよ」
「え、う、うん、わかった」って、
おれなんかも誘ってくれるんだよね。

うれしかったなあ。

でも隣のクラスにはアブカワってというのがいて。

大人の男の先生よりも、でっかくて。
どーん、と筋肉質な感じで太ってて。
ロン毛で、前から後ろから髪の毛、だらーって垂らしてて。
無口で。

なんだあれ、不気味だなあ、って。

彼独特な、なんというかなあ、
すさんだ、というか、そんな空気があって。

「あいつは不良だから。
暴走族のお兄さんとかとも付き合ってた、
シンナーも吸うし、タバコも吸うし」

朝鮮高校の女とセックスをしてる、という噂まであった。

歩いてると大体、三人くらい子分がついてて。
そのなかにデイベスケンジがいて、
ジェリーフジオみたいな顔してて、
こいつはハーフなのに英語が全然、しゃべれなくて。
不良グループですよ。

ケンカになったら嫌だな、と思った。
ここでケンカしたら、
また日進小学校みたいなことになっちゃうから、と思った。

俺は近寄らないようにしてたんだけど、
当時は転校生なんかめずらしいから、
ある日、帰りに待ち伏せされて
「一緒に帰ろうぜ」って言われて。

嫌だな、嫌だな、と思ったんだけど、
そうして一緒に帰って。

特に何も言われなかった。
子分になれ、とか、ケンカするとか、

そういうことも言われずに。
言葉少なに、そうして、ただ一緒に歩いた。

それから何日かした後、
またアブカワがいて。
それがこの日は一人だけで。

「おい、俺の家、遊びこいよ」

そう言われてアブカワの家へ。

まったく整備されてない、
雑木林のなかを歩いてて。
木は倒れてるし、すごい大きなクモの巣が張ってたりする
林のなかを二人で歩いて。

道らしい道なんかもない、
獣道みたいなところを、
林の奥へ、奥へと歩いて。

そんな林のど真ん中にポツンと小さな家があって。
すごいボロイ家で。
人が住んでるなんて、ありえないような、
すごいボロの家で。

家もボロい家だったんだけど、
ああ、家とタメ張ってんなあ、って。

そこで、おかあさんが洗濯物を干してて。

「あ、友だち連れてきたの」って。
やさしそうな、すごく印象がよくて。

「こんにちは」って挨拶して。

ここが兄貴の部屋だよ、みたいに説明されて。
アブカワの部屋のなかは、
キャロルのポスターとか、
ボクサーの写真とか何枚か貼ってあって。

こいつは、すごいんだ、とか説明されて。
俺なんかボクシングなんか全然わかんなくて、
ああ、そうなんだ、とか言って。

ボクサーって、
なんか薄暗い、
タイガーマスクとかアントニオ猪木とかとは違って、
なんか暗い生き物だなあ、って。

そんな話を聞いて、
「おい、おもて行こうよ、いいものやるよ」って、
母ちゃんから見えないところに入って、
そうしたら懐からハイライト出して。

「おい、吸えよ」

俺はびっくりしちゃって、
「え、俺はいいよ」って。

「取れよ」
「いや、いいよ」

そうしたらアブカワ、仕方ないって顔して、
自分でくわえて火を点けて。

うわあ、って思った。
こいつ、すげえ不良だな、と。

こりゃ、近寄っちゃいけないな、と思った。
それっきり付き合うのは止めた。

それが卒業の前、
近くの公民館で謝恩会があって、
そこで俺のクラスは「像のダンボやろうよ」ってことになって、
みんなで芝居をやって。

隣のクラスも、みんなで何か出し物やって。
やっぱりアブカワは、それには参加してなくて。
そうしたら「じゃあ、次、アブカワくんが一人で歌うそうです」と。

ギターを片手に持って。
海援隊の歌。
ギターを弾きながら、おふくろの歌。

みんな、しーん、となって。

俺はショックだった。
ああ、こんな、やさしい気持ちを持ったやつだったのか。
それなのに俺は、こいつと付き合うの止めちゃったなんて。
悪いことしたなあ、って思った。

演奏が終わっても、場内はしーんと静まってて。
そうしたら先生の一人がパチパチっと拍手をして。
そうして、みんなが拍手して。
場内が拍手で。

でも、それっきり。
アブカワと会うことは、それから二度となかった。
中学の時、アブカワは進学して一日だけで学校を辞めてしまった。
少年院に入ったという噂を聞いた。
一度、この家に行ってみた。
そうしたら、もう家すらも跡形もなくなってしまったた。

アブカワ、あいつ、今頃どうしてるんだろ。
死んじゃったのかも知れないよなあ。

第四章-1 訣別。

こうして俺は小学校六年から、おじさんの家で。
おじさんは本当に自分の子どもと同じように扱ってくれた。
俺の部屋まで用意してくれた。
テーブルにデスクまであるんだよ。
うれしかったなあ。

この家には二人、子どもがいてね。
上は小学一年のおにいちゃん、ヒロシくん、
幼稚園の妹がタエちゃん。

二人とも「おにいちゃんが来た」って喜んでくれた。

ご飯もいっぱい食べなさい、って。

「あんな環境にいたから、家に来て普通の環境がいいんだ」と、
おじさんは言ってくれて。

イキイキと、毎日が楽しくて。

でも、こうして預けられた直後から、
親父は酔っ払って、
夕飯食べに来てた。

働かないで、
酒ばかりで。
子どもながらに、
みじめな親父だなあ、と思った。

そんな親父を持った俺のことを、
おじさんは哀れんでくれてたし、
大事にしてくれたんだ。

ある晩、自分の部屋で勉強してたら、

隣の茶の間から怒鳴り声が聞こえてきて。

いきなり親父がバーンッて
俺の部屋に入ってきて。

「おい、ヒロユキ！こんな家、出てくぞ！」

そう怒鳴ったんだ。
だから俺は「嫌だ！」って。

そしたら、いきなり右の拳で顔を
バカーンッと殴られて、
俺は椅子ごと床にひっくり返った。

そしたら、おじさん、
ものすごい勢いで俺と親父の間に割って入って
「ヒロくんを殴ることないじゃないか！
殴るなら俺を殴れよ！」って。

「なんだと、この野郎！」

二人で怒鳴りあって。

おばさんが隣の部屋で電話してて、
間もなくサイレンの音が近づいてきて、
警官が家のなかに入ってきたんだ。

警官が来たら親父のやつ、
急におとなしくなりやがって。
いやあ、なんでもないですよ、
ただの兄弟ケンカですから、なんて言ってんの。

情けない男だなあ、ってね。
思ったよ。

そんなこともあってね、
そうして、
ここで過ごした小学校での生活は二ヶ月で終わって、
俺はこの家で中学校に進学することになった。

おじさんとおばさんと一緒に、
デパートに出かけて、
こっちのがいいんじゃないか、
いや、すぐ大きくなるから、
こっちのがいいんじゃないか、って、
新品の学生服を買ってくれた。

詰襟の学生服。
ほんとうに、うれしかったよお。
新品のピカピカの学生服ですよ。

俺、大事に着てたんだよね。
学校も楽しかったし、
人生がガラリと変わったんだ。
このまま幸せな暮らしが続くかと思ってたんだよね。

そしたら、ある日、ここのお兄ちゃんのヒロシくんと
ブランコで遊んでたらさ、
こうやって思いっきり揺すって遊んでたんですよ。
ヒロシくん転んで。

ものすごい痛がって、
ものすごい泣いてて。

おれ焦っちゃって。
あわてて。

おじさん呼んで。
救急車で。

ヒロシくん、腕の骨を折ってしまった。

おれは、すごくショックで、心配で。

そうしたら、おじさんが、ぽつり、と。

「おまえのせいだ」

俺に、そう言ったんだ。

おまえのせいだ、と言われた、
あの一言。

ガーン、ときた。

もう、すっかりねこの家の子になってた。
でも違うんだよ。
やっぱり俺は、よその子なんだよ。
他人なんだよ。
そういうことなんだよ。

中学一年の夏だった。
それから、部屋のなかにひきこもり。
外に出て行くところもなくて。
映画を観た。

『続・愛と誠』
南条 弘二の主演。
不良たちの物語。

心、傷つき、心を閉ざして、
それ以来、ケンカに明け暮れる主人公・大賀誠。
そんな主人公に、献身的に想いを寄せる早乙女愛。
なぜならば大賀誠こそは、
幼い頃の自分の命の恩人であり、

そのとき彼が負った怪我が原因で、
その後の彼の人生を大きく左右してしまったのだから。

そんな早乙女愛を慕う優等生も登場する学園ストーリー。

やさぐれた大賀誠の気持ち、
まるで女神のような早乙女愛の心。

感動した。

この映画に感化されて何度も、何度も、この映画を観た。
こんな世界に憧れた。

その日、
それまで大事に着ていた学生服も、
袖を大きくまくって、
胸元も大きく開いて。

改造して不良になった。

いちばん最初にケンカしたのは、
デイベスケンジ。
ハーフの外国人なのに英語、全然しゃべれないの。
もう完璧に白人顔なのに。
朝いきなり、そいつを見て
「ちょっと、おまえ来い！」
「なんだあ、てめえは！」ってことになって。

こいつはアブカワとつるんでたやつで、
小学校のときから顔は知ってたから。
でもケンカする理由なんか、まったくなかったんだけど。

そう、ケンカする理由は、まったくない。
もう誰でもいい、ケンカしたいだけ。

そうしてクラスの後ろのほうでケンカした。

背負い投げから袈裟固め。

でも袈裟固めは関節技じゃないから。

ただ抑え込んでるだけだから。

だから、じれったいんだよね。

相手はなかなか、まいったしないから。

だから抑え込んだ状態で殴ったりしてね。

背負い投げする前に、

両手で掴んで、そのままガーンツと膝蹴りぶちかましたりしてね。

毎日ケンカしてるうちに、

そういう打撃も自然に取り込んでたよね。

映画の真似して、ケンカばかり。

こうして中学一年の夏以降から、

毎日、クラスでケンカしてた。

まあ、そうしてケンカした後はね、

お互いにケロツとしてたよね。

別に恨みを残すとかね、そういうのはなかったんだよね。

担任の女性の先生は、おとなしい人で、

あんまり俺が毎日ケンカしたり、

映画の真似して授業のボイコットやったり。

もう、もう暴れまくったからね。

そんな毎日に耐えられなくなっちゃって、

担任の先生、学校に来なくなっちゃった。

そしたら体育会系の島村先生に怒鳴られて、

「おまえら何やってんだあ！こらァ！

おまえらのせいで斉藤先生が学校こなくなっちゃったじゃないか！」

そう怒鳴られて、
サンダルのカカトの部分で、
俺もデイビスも、
もうバッチン、バッチン、顔を殴られて、
思いっきり、お灸をすえられた。

あれは、でも本当に、
あの担任の先生には申し訳ないことしたよなあ。
ぜんぜん、あの先生には、ほんと何の責任ないからねえ。

いやあ、ほんとに申し訳なかったよなあ。

でも俺は歯止めなんかきかなかったし。
あの頃はねえ。

高校に進学しても止まらなくて、
そうして17歳のとき、
おじさんの家、飛び出して、
川口で暴走族に入って。

当初は不良仲間の家を転々としてたんだけど、
結局、住むところないし、
それで浦和に住んでる母ちゃんとねえちゃんの家に行ったんだよね。。
ボロい団地みたいなところに住んでたんだけどね。

家のなかは狭いんだけど整理されてて、綺麗にしてあってね。
テレビとかステレオなんかも置かれててね。

久しぶりに、かあちゃんと再会したんだよ。
仕事から、ねえちゃんも帰ってきて。
ねえちゃん、俺の格好見て、
なにしに来たのよ、って冷たくて。

もう、わずらわしいことには、

かわりあいたくない、っていうね、
そういう気持ちだったんだろうな。

このとき、ねえちゃんは高校を卒業して就職、
池袋のサンシャインでエレベーター・ガールをしてた。

「かあぼうは元気してる」なんて、
バツが悪くて俺、そんな話してね。
そしたら
「最近ね、おしりから血が出るのよ...」っていうんだよね。

「えっ、病院、いきなよ」
「近所の病院には行ったのよ」
「そしたら何だった？」
「うん...。町のしっかりとした大きな病院に行きなさい、って。
そうしないと大変なことになるよ、なんて言うのよ」
「そりゃ、ちゃんとした大きな病院、行かないとダメだよ」
「うん、まあねえ...。ああ、そう言えばね、
お父さん今、刑務所入ってんだよ」
「えっ?どうしたの?」

弟さんが経営するタクシー会社に、
ガソリン撒いて火を点けたんだ、って。
懲役七年の実刑判決。

つくづく...ばかなおとこ、だよなあ。

そんな話してて、それで俺、寝るとこないからさ、
その家の狭い茶の間で寝てね。

頭なんか、こーんなアフロ・ヘアにしちゃってさあ。
バイク乗ってケンカばっかしてて、
深夜喫茶で仲間たちとたむろしたりしててね。

その時、ちょっとした出会いがあって。
初恋ですよ。

同じ歳の女で、ズベ公ですよ。
でも見栄えは、綺麗な女でね。
細身だけどスタイル良くて、
こーんなバニーガールの格好して働いてたもんね。

その頃、不良仲間で並木(なみき)ってヤツがいて、
そいつは俺と同じくらい背が高くてね、
仲良かったんだけど、
ちょっと変わったやつでさ。

この時、テレビ番組で『非情のライセンス』ってのがあってね、
主演の天地茂に、こいつ惚れ込んでて。
もう毎回、ビデオ撮ってさあ、
身振りとか口調とか服装なんかも全部、真似しちゃってて。

なんか、こう、いつも自分の、そういう世界作っちゃってて、
その世界のなかに生きてるようなヤツでさあ。

こいつは自分に自信がない、って言うのかなあ、
シャイな男でねえ。

「こういう女がいるんだけど、紹介するから」って。
そうして、この女と知り合ったわけなんだけどさあ。
本当は並木のほうが、この女に好意があるのに、
言えないんだよねえ。
自信がないんだよ。

それで俺を紹介したんだよ。

千鶴(ちづる)って女でね。

知り合って間もなく、俺と付き合うようになって。

母ちゃんの団地にも連れてったんだよね。

ミニスカートで真っ赤なマニキュアして。

俺と千鶴が何気なく話してて、

あいつ最近見ないよなあ、

ああ、あいつは今、練カン入ってんだよ、

え、そうなんだ。

あの女は妊娠しちゃってさあ、なんて。

あたしが働いてるバーのマスターがさ、

お店、終わると鍵かけちゃって、

おれには、おまえしかしない、って、

泣くのよ。

もう、ずっと泣いてて、帰してもらえなくて困ってんの。

へえ、そうなんだ。

情けねえ男だなあ、あっはっはっ！

二人でそんな話してたの母ちゃんが聞いててね、

それで俺、言われたんだよ。

「母ちゃんはね、あの子、家に入れるの反対だよ。

おとなしそうな顔してて、あの子は相当なもんだよ」って。

そんなことないよお、って苦笑いしたんだけどね、俺はね。

そしたら、しばらくして、
千鶴、俺と会いたがらなくなって。
えー、おかしいなあ、変だよなあ、って。
それで問い詰めたんだよ。
なんだよ、変じゃないかよ、どうしたんだよ、って。

「全部、並木くんから聞いて」って言うんだよ。

なんで並木...。
それで並木に電話したんだよ。
千鶴がそう言うんだよね、どういうことなんだい、って。

じゃ、これから三人で会おう、って並木が言うんだよ。
そうして三人で喫茶店で会って。

千鶴と並木は、ぎゅっと手を握り絞めてて、
千鶴はそのまま並木の胸に顔を埋めてんだよ。

「どういうことなんだよ」って。
「実は千鶴には子どもがいるんだよ」
並木がそう言ったんだよ。
前に付き合ってた男の子ども、だって。
俺はちょっと驚いたんだけど言ったんだ。

「いいよ、そんなの、かまわないよ。
俺の子として育てるから。
なんの分け隔てなく、俺の子として育てる！
よし、結婚しようぜ！俺はかまわねえからよお！」って、
俺はそう言ったんだ。

そうしたら並木は困った顔になって、
「いや、また改めて話ししよう」ということになって。

結婚しようと思った。

子どもも育てようと、思ったんだ。

覚悟決めたんだよ。

そうして、また三人で話そうと連絡が来て、
並木と二人で、千鶴が待つ喫茶店へ向かう途中で、
こう言われたんだよ。

「わたしは若狭くんのことが好きだけど、愛せない、って。
千鶴がね、そう言うんだよ」

愛せない、って....。

ショックだった。

男として、俺はダメなのか。

喫茶店で千鶴と会って、
俺は言ったんだ。

「なんで俺と別れるんだよ」

そしたら千鶴は、こう言ったんだ。

「だって、もう若狭についてゆくんだから、
もう俺は必要ないんだから、じゃあ、俺とは会うのはやめよう、って、
そう並木くんに言われたから。
だから、わたしは若狭くんと別れる」って。

呆然とした。

「千鶴は俺に惚れてんだよ」と。
並木は、どこか今までと違って、
なにか自信に満ちていた。
口調も、態度にしても。

俺はというと、もう完璧に自信を喪失してしまっていた。
俺じゃ、だめなんだ、って。

女もいない、住むところもない。
なんにもない。
どん底。

それから、しばらくは、
抜け殻みたいに、
ぼんやり、ふらふらしてた。

でも、こんなに狭い団地の家に、
このまま、ずっと三人で暮らして行くことなんか、できないから。

だから亡くなった長作じいさんのところに、
かあちゃんと一緒に相談しに行ってね。

そのとき、押入れから古いアルバム出して。
俺の子どもの頃の写真があって。
そこに親父のおふくろの写真があって。
どこかの温泉旅館で、
親父と親父のおふくろが背もたれの椅子に並んで座って、
くつろいでる写真があって。
そこに二人とも、心臓にマチ針が刺さってて。
セロテープで止めてあって。

母ちゃんがやったんだよね。

「なにこれ？」

「心臓を打ち抜いてやったんだ」

「なるほど…」と思った。

そうして他の写真も探してたら、
親父がアメリカでリンカーンに乗ってる写真があってね、
いきなり、すごく機嫌悪くなった。

なにやってんだよ、これ…。
なにさらしとんじゃ、と。

そうしてると、もう一枚、
俺の小さい頃の写真も出てきて。
なんか大事にされてて。
照れくさいから、それは黙ってた。

小学校四年生くらいの頃の写真。
山内さんの新しい建物の脇で。
白黒の写真。
山内のおばさんが撮ってくれた写真。
俺、はにかんだ顔してて。
それ一枚だけ、大事にとっておいてくれたんだ。

当時は貧乏で、
家にカメラなんかもなかったし、
だから写真なんて、なかったんだよね。

まあ、そんなふうに長作じいさんのところへ相談しに行ってもさ、
らちがあくわけもなくてね。

そうして、また不良仲間たちの家を転々としながら、
並木と千鶴が付き合ってる、って噂を
聞いてたんだけど、
結局、別れたとかなんだとか。
そういうことですよ。

並木には罪はないけど、
千鶴には腹が立ってきた。
あの野郎、ぶん殴ってやればよかったよ。

やっと気持ちが、
ふっ切れた、っていうかね。

まあ、俺の初恋なんてさ、
ぼろっぼろの、そういうもんでしたよ。

ただ、あの女、
よく酔っ払って血、吐いてたんだよ。
大丈夫なのかな、あいつな…。

まあ、それで、どこにも寝るとこないと、
やっぱり結局、かあちゃん家に行ったりしててね。

桜が満開の夜、団地に帰ったら救急車が停まってて、
二階の部屋から、
かあちゃんが近所のおばさんに支えられながら、
階段降りてきて。

バツ悪そうな顔しながら、
すいません、すいません、って
小さく笑って。

またお尻から血が流れてきて、
具合が悪くなった、っていうんだよね。

俺とねえちゃんも一緒に救急車に乗って。
救急車のなかで、あのサイレンの音が、頭の真ん中で、
わんわん鳴り響いてて。

うわあ、って。
終わりじゃないか、って。

おそろしいくらいに不安になって。
ねえちゃんは母ちゃんの手を両手で握り絞めて
「おかあちゃん、死なないで！」って叫びながら、
ぼろぼろ涙流して。

もう、終わりなんじゃないか。

救急病院に到着して、
「痔はありますか？」って、
そればかり、しつこく聞いて。
痔はあるんですけど、って。

結局、レントゲンを撮っても解らないから、
後日、腹を切って調べないといけない、ということになって。

そうして、そのまま母ちゃんは入院。
俺とねえちゃんは仕方なく団地へ戻って。

俺は何度も病院へ見舞いに行ったんだけど、
日増しに痩せ細って、
顔色なんか黒くなってきて。

お腹を切って開いて調べたら、
もう手のつけようがない、
ということで、そのまま。

末期の肝臓がんだった。

見舞いに行った『回復室』は、
ばあーん、と辺りが広くて、
ずらりとベッドが並んでて、
その、いちばん向こうに、
母ちゃんが一人だけ、ベッドに寝てて。

うわあ、って。

この『回復室』の雰囲気っていうの、
こう、なんか、すごい、もう、ぐわあああっと、
もう、すごい、亡くなった人たちの霊気というか、
そういう魂というかね、
それが、もう、ぐわわわわっと。
漂ってるんだよね。

もう、母ちゃんは、俺に顔を向ける力もなくなっちゃって、
点滴してて、尿管にも管入れられてて。

ある朝、八時頃、俺が団地で寝てたら、
ドアがばーんと開いて、
ねえちゃんが泣き叫んで立ってて、
俺、飛び起きて。

「おかあちゃん、死んじゃったよおー！」

そうして慌てて俺、ズボン履いて。

タンカで運ばれてきた母ちゃんの遺体。
白いシーツがかぶせられてて、
もう、ぺったんこ。

痩せ細っちゃってて、もう、ぺったんこなんだよ。

救急車で運ばれてから一ヶ月くらいの出来事。

お葬式。

親戚に電話して、ねえちゃんと二人で。

あっちこっちから親戚の人たちが、
集まってきてくれて。

アフロヘアの俺を見て、みんな視線、冷たくて。
そしたら母ちゃんの弟さんが来て、
ものすごい顔して、
俺の前に座って、俺の顔に人差し指をつき付けて、
こう言ったんだ。

「おまえが殺したんだからな」

俺は、もう、ただ、うなだれるだけで、
何も言えなかった。

ねえちゃんの彼氏が来てくれて、
ねえちゃんを支えてくれていた。

俺と二人きりになってしまったから、
一緒に住んでくれるようになったんだよね。

ねえちゃんの彼氏はガードマンやってて、
柔道やってたから体格がガッシリしてて、
大柄で、とても気さくで、やさしい男で。

落ち込んでる俺なんかのことも、
なぐさめてくれた。

葬式が終わって、
しばらくして、かあちゃんのお客さんだった、
という女の人が、お線香をあげにやって来てくれた。

化粧品を買ってくれてた、お客さん。
その人が、こう言った。

「子どもたち二人を連れてお買い物に行ったりとか、
そんな頃にね、もう死んじゃおうかな、って。
お味噌汁に毒入れてね、
子どもたちと一緒に、このまま死んじゃおうかな、って
そんなことを考えたことが、あったって、
言ってたんだよ」

こうして母ちゃんが死んじゃって、
俺はしばらくこの団地で、ねえちゃんと二人で暮らした。

ねえちゃんの彼氏は心配してくれて、
よく団地に来てくれた。
そうして俺たちが悲しそうにしてるから、
気をつかって一緒に住んでくれるようになったんだよね。

俺なんかも、かわいがってくれた。

かあちゃんが居なくなった部屋の空気が、
この人のおかげであつたかなものになってた。

ねえちゃんも、ようやく笑えるようになっていった。

この人は刑務官になるのが夢なんだと言った。
仕事しながら一生懸命、勉強して、
必ず刑務官になるんだ、と言っていた。

そうして、また、いつものように、
団地の部屋のなかで三人で夕飯を食べているとき、
「刑務官になるには、
近親者に前科者がいないことが条件なんだけどね」と、
ほんとうに何気なく、そう言った。

「あ、うちの親父、前科者になるんじゃないのかなあ...」
ふっ、と俺はそう言った。

そうしたら急に雰囲気が変わった。

変わっちゃったんだよ。

そうして、ねえちゃんの彼氏は来なくなった。

夜、風呂場で、ねえちゃんが、
すすり泣いている小さな声が聞こえてきて。

たまらなかった。

でも、しょうがないよね、こればかりは。

親戚の人たちが集まってきて、
ここの団地で俺たちは暮らしてゆけないだろう、
ということになって、
ねえちゃんは親戚の家に預けられて。

でも、ねえちゃん、その家族とうまくいかなくって、
その家を飛び出しちゃって。

しばらくして、
池袋のサンシャインのエレベーター・ガールも辞めちゃって、
それから、
どこに行ったのか、どうしているのか、わからない。

それっきり、行方がわからなくなった。

親父は五年で出所して、
そしたら今度は弟さんの自宅に火を点けた。
半焼近く、かなりの被害になった。
お金を貰えない腹いせに放火。
そして二度目の懲役。

※『続・男、若狭弘幸の物語』

<http://p.booklog.jp/book/29673>